

---

# 短

小野チカ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短

### 【Nコード】

N9783Y

### 【作者名】

小野チカ

### 【あらすじ】

ジャンルいろいろごちゃ混ぜの短編集「サイトにも同じ物を掲載しています」

## 小心者の男【大学生×大学生：彼氏視点】

俺の彼女は俺より男っぽい。見た目が、ではなく、中身が。

だから、たまに女であることを忘れてしまう。

それが、彼女にとって地雷ポイントだと言うことも、忘れてしま  
う。

「なあ、空知。今日空いてねえ？ 夜、合コンあんだけど」

今日は晴れでも雨でもない、かといって曇りと言うには向こうが  
ちよつと晴れてるような微妙な天気だ。大学のカフェテラスで二限  
を終えた俺等は紙パックのジュースや、缶コーヒーを片手に携帯を  
いじったり、i P h o n e いじったり、P S Pをいじったりしてい  
る。椅子に体育座りをしていちごミルクを飲んでる俺に、てっぺー  
が尋ねた。

俺は、出会った女八割に“かわいい”と言われる顔をしている。  
思春期にはそこそこ悩んだけど、そのお陰で女に苦労したことはな  
い。特に、年上のオネエサマ方からは受けがいい。だから、大学に  
入ってやたら“人集め要員”として声がかかる。

それは彼女と付き合いだした二年の時も変わらず、こうして就職

活動が一段落した四年になっても相変わらずだ。

「いいよ、今日はどこ？」

「知り合いのデパートの受付嬢と、エレベーターガール」

幹事役のてっぺんがそう言つと、俺らのグループのやつらがおお、と声を上げる。なんでもてっぺんの姉ちゃんの知り合いの職場の人たちらしい。もうそれ遠過ぎて、知り合いとかいうレベルを越える。

高校からの付き合いのてっぺん、俺。気がつけば仲良くなつてたつつちゃん、秋生の四人でこの四年間過ごしてきた。その間にそれぞれ彼女が居たり居なかったりしたけど、現時点でいるのは俺だけだ。

「空知、お前この間も行つてたけど、鷹野さんいいの？」

秋生と俺の彼女と同じ高校だ。仲良くはないけど、顔は知ってる程度らしい。

秋生は、四人の中で一番頭が良くて、オセロが無敵で、マリオカートが激弱な奴だ。俺、賢いですってオーラがびんびん出ている。シルバーの眼鏡がまた、出来杉君度を上げている気がする。

「いいんじゃない。今日カナ、バイトだし」

「空知は冷たい彼氏だよ！」

「ドSのつつちゃんに言われたくない」

いちごミルクの紙パックを飲み干した俺は、よいしょと言ってそれをゴミ箱に投げる。入った。よし！今日はなんかいいこともあるかも。

「俺がドSだろうがドMだろうが、関係ねえだろ」

「え、なに？ ドMなの？ 踏んであげようか？」

「んな趣味ねえよ。アホか」

つつちゃんの、男っぽい顔が俺は好きだ。

ボーイズラブ的な意味合いじゃないよ！単純に俺は中性的な顔だから、男っぽいつつちゃんの顔がいいなーって思う。立派な眉毛とか、驚鼻とか、切れ長の一重の眼とか。

あと、ずっとフットサルやってるから程よい筋肉マンなところもいい。俺、どれだけ鍛えてもあんまり筋肉つかないから、羨ましいことこの上ない。俺がプチキン肉マンになっても、カナは額に肉つて書いて楽しまれるのがオチだ。

てっぺーは早速、携帯で今日の女側の幹事と電話している。相手の女は声がでかすぎて、内容がダダ漏れだ。メンバーの名前を読み上げていると、キャアカアと五月蠅い声が聞こえた。

「お、噂をすればなんとやら」

つつちゃんがそう言って顎を上げた先にはカナが居た。ものすごく気怠そうに自販機のボタンを押している。

カナが女の子だと思うのは、長い髪の毛と、セックスしてる時だ

けだ。

「おい、鷹野！」

「バカ、土田。呼ぶなよ」

つつちゃんの袖を引っ張った秋生は、呼ばれた事で俺等に気付きこっちへ向かってきたカナを見て、舌打ちした。

「なんで？」

「お前のそういうところが、女に嫌われるんだよ」

「は？ 意味わかんねえ」

大雑把なつつちゃんと、神経質な秋生はたまにぶつかる。でも仲は悪くないと思う。俺は大学以外でのつつちゃんと秋生を知らないから、多分、だけど。

俺が合コンに顔を出す度に秋生は心配してくれるけど、カナは俺より男っぽい。男の俺が言うんだから、確実だ。

「なに、汐見たち今日も合コン？」

ヤ二魔のカナは声がハスキーだ。

でも、セックスでいくときのカナの声はちゃんと女の子で、これを知っているのがこの中で俺だけだと思うと、ちよっと優越感だ。

秋生はそうだよ、とぶつきらばうに返事をする、横からつつちゃん、デパートの受付嬢とエレベーターガールだぜ、と何故か得

意げに言った。

「いいなあ、高確率で美人じゃん。足だって綺麗でしょ？ 私も目の保養したい」

いちごミルクのパックにストローを刺しながらカナが言う。深爪じゃないかと思うくらい切りそろえられた爪は色気のイの字もない。

「……空知も行くよ」

「いつてらっしゃい」

ほらみる、カナはこういうやつだ。

残念だったな、秋生。

「いつてらっしゃいって……普通ヤキモチ妬かないの？ 女って」

「他の女の子がどう思ってるかなんて知らないし。それにさ、毎日トンカツだと飽きるじゃん。たまにはお茶漬け食べなくなる気持ちと一緒にじゃないの？」

カッターシャツにジーパン、スニーカーはカナの標準装備だ。長い髪の毛は、夏以外はそのまま下ろされている。いちごミルクを飲みながら、カナはジーパンのポケットから煙草を取り出した。百円ライターで火をつけると、上手そうに吸う。いちごミルクと煙草の組み合わせなんて俺には相当エグく思えるけど、学校で見かけるカナは、よくこの二つを持っていたりする。

「鷹野さん、それは浮気した男が言い訳に使う文句だよ」

「そう？ もつともじゃん」

ふーと吐いた息は風に流されることもなく、そのまま真っ直ぐ上に上がった。

「ソラチ、ちゃんと女の子の分も奢ってきなよ」

「へーい」

俺の名前を呼ぶ時のカナは、他の女と違う。媚びも、計算も、甘えも含まれていない。ただ単に、単語を言っているだけだ。俺になんて興味ない、って言われているようなその言い方を、俺は密かに気に入っていたりする。

はいはいじゃーねえーと言って電話を切ったてっぺーが、よ、とカナに手を上げると、カナも煙草を持った手を上げた。

「今日も空知借りるな」

「借りるもなにも、あたしのモンじゃないし。お好きにドーゾ」

につこり笑ったカナは、もう一息吐くと灰皿に煙草を押し付けた。雑に頭を掻くと、いちごミルクを一気に飲み干すと、それを俺の後ろからひょいと投げた。ゴミ箱のフチに当たって、紙パックがゴミ箱に入る。

「よし、今日はいいいことがあるかも。じゃあ諸君、健闘を祈る！」

じゃあねーと手をふりながら去って行ったカナを、秋生は不思議



な生物でも見る様な目で見ていた。秋生は俺がカナと付き合い始めた時、首が取れるかと思うくらいかしげていた。

「……鷹野さんって空知のこと本当に好きなのか？」

そう聞かれても、カナの気持ちが手に取る様にわかれば、俺はこんなところでバイトの合間を縫って合コンに参加したりせずに、エスパーを職業にして小金持ちになっているに違いない。

秋生の言葉にてっぺーも頷いていたけれど、俺はこいつらが俺に何を言わせたいのかよくわからなかった。

「しらね」

と言った俺に、いいよな、と言ったのはつつちゃんだった。

「俺の前の彼女なんてＡＶ見ただけで浮気だなんて言われてたまつたもんじゃねえよ。俺もカナちゃんみたいな物わかりのいい彼女が欲しいわ」

「カナはやんないよ」

笑って言ったけど、半分本気だ。

カナがつつつちゃんみたいな男がタイプだと言ったら、俺は勝ち目なんてない。中身はともかく、外面は対極にいるような男だ。

俺だって最初はつつちゃんみたいに思ってた。カナが俺を好きで、最低でも一緒に居て楽だから付き合ってるんだと思っではいる。

けど、時々ふと思う。

カナの独占欲のなさに。  
物わかりの良さに。

俺じゃなくても、いいんじゃないかって。

「どうだったー、エレベーターガール」

同じ講義を取っていたカナが、俺の席の横に立って尋ねた。カナに会うのはあれ以来3日ぶり。一昨日メールをしたけれど、その内容は合コンのことではなく、今日提出の課題についてだった。

「可愛い子ちゃんがいつばいいた」

「へえ、よかったじゃん」

カナは同じ講義を取っていても隣の席には座らない。例えば友達が休んでも、カナは違う席に座る。理由は知らない。

俺は、束縛されるのが嫌いとも、くつつかれるのが苦手だとも言

ったことはない。だけど、カナはそうする。

カナの前に付き合ってた女は、大学内でも四六時中一緒にいることが当たり前、みたいな女だったから、それをみていたカナが何を思ったのかはよく知らない。カナは過去を聞いて来ないし、俺も言わない。聞かれてもないのに言ったら、ただのアホだし。

カナが去ろうとした時、土田が上から下りて来た。階段教室のこの部屋は、後ろが生徒の入り口だ。

「よお！ 空知、カナちゃん」

「つつちー、やっほー」

ひらひらと手をふるカナは、いつもと同じ。よ、と手を上げた俺も、いつもと同じ。

「カナちゃん聞いてよ、空知の奴さあ、この間の合コンでオネエサシーン一人お持ち帰りしやがってよお、超美人で足が綺麗なエレベーターガール。空知が来ると盛り上がるからいいんだけど、みんな空知に持ってかれるから散々だぜ」

笑いながら言う土田もいつもと同じ、俺も本当のことだから否定しない。これも、いつもと同じ。

お持ち帰りだなんて言うけど、実際は駅まで送ってさようなら、だ。別にカナ命じゃないけど、誘われたからってホイホイ乗るほど盛ってない。絶倫じゃないし、俺はカナと自分の右手で十分だ。

「まじで。やるねえソラチ」

「見る？ この子、この子」

何が楽しいのか、携帯で取った合コンの様子を嬉々としてつつちゃんがかナにみせている。

「ソラチの見る目残念だね。私この隣の女の子の方が好きだ」

「やっぱり！？ 俺もこっちの子の方が好み」

文字にすれば、カナの言葉は男友達と喋っているようだ。

「っていうか、カナちゃんってホント怒んねえのな」

「何が？」

「空知が浮気してたらどうする？ カナちゃん」

へらへら笑いながらつつちゃんが尋ねる。その問いに、俺もカナもつつちゃんを見上げた。笑いながら、つつちゃんはカナを試している。

「つつちーには教えない。意地悪だから」

ニヤリと笑ってそう言い放ったカナは階段を下りていった。俺は、その返しに何か違和感を覚える。いつもならカナは「どうもしない、ソラチの自由だ」と言っただ。

「なに人の彼女で遊んでんの。つつちゃん」

「遊んだんじゃなくて試したんだけどな。はぐらかされた」

空知はカナちゃんのどこが好きな訳？ とつつちゃんに聞かれて、俺は戸惑った。

取り立てて美人でもなく、

スタイルが良い訳でもなく、

いつもヤニ臭いし、

オシャレに興味ないし、

下ネタ話しても平気で割って入ってくるし、

俺が合コンに行こうが、女の子と二人きりで会っていろいろ詮索しないどころか、ふーんで終る。

俺のことが好きだ、と言ってくれたこともない。

「わかんね」

「お前等大丈夫か？」

「……しらね」

何も言えなかった。

いつもと同じだったはずなのに、急にぼっかり空気穴が空いたようだった。

\*\*\*

カナは突然家に来る。

なのに、合鍵を渡そうとしたらいらない、と言っただ。

「……俺がいなかったらどうするわけ」

「居たからいいじゃん。お邪魔しまーす」

いつもの格好に週刊少年ジャンプを持ったカナが上がり込んできたのはあれから二日後。ベッドの上に寝転がり漫画を読みあさるその姿は、本当に彼女ではなく男友達だ。

てっぺーだって、事前に連絡はくれるし、来て早々何の会話もせずに漫画を読み出したりしない。

「俺、後30分したらバイト行くんだけど」

「いつてらっしゃい」

「泊まってくの？」

「適当に帰る」

その返事に俺は首をかしげる。  
カナは一体何しに来たんだ？

「……何しに来たの？」

「用がなかったら来たら駄目？」

「そんなことないよ」

「じゃあいいじゃん」

そう言っただけが用意している間も、漫画を読むだけでカナは他に何をするわけでもなかった。

「カナってさあ」

「なに？」

「彼女っていうよりツレっぽいね。物わかりいいし、女っぽくないし、嫉妬もしないし。たまに女だったって思う時があるよ」

少し寂しいとは言わない。

本当に俺のこと好き？　なんて女々しい事は聞けない。

その言葉のどれもが地雷だったことを、俺はすっかり忘れていた。言い終わった俺は靴紐を結んで立ち上がった。

「じゃあ、鍵ここに置いてー……」

続きは、飛んで来たジャンプをよけたことで消えた。ガチャン、と鈍い音を立てて玄関扉に当たったジャンプが落ちる。

「あつぶなー、何してんのカナ」

ジャンプを拾って顔を上げた俺は仰天する。

あの、ホラー番組を見ても、こしょばしまくっても、暗闇に一人

きりにしても泣かないカナが、目に涙をためていた。

「毎回合コンに目くじら立てて、泣いて止めて、毎日メールしてくれなきゃ怒って、彼氏の部屋に入り浸るような依存する女なら、ソラチは私を好きでいてくれるの？」

しまった、と思った時には遅かった。狭い玄関に立ち尽くした俺を押しつけて、カナが部屋を出て行った。頭を掻いた俺はやつちやつたな……と呟いた後、カナがまだ、俺のことを青山君と呼んでいたのを思い出した。

「青山君さあ、女変えるペース早くない？」

あの頃のカナは、髪がボブだった。赤い眼鏡をしていて、シャツとジーパンは同じでも、靴はぺたんこ靴でスニーカーではなかった。「女ってめんどーなんだもん。あれしろこれしろ言うし、それしたらしたで、足りないっていうし。どういう脳みそしてんの？」

「私に聞かれても知らないよ」

「未知の生き物だ……面倒くさすぎる」

「……じゃあ、どういう女の子だったらいいな、って思うの」

「女遊びも笑って許してくれる懐の広さがあって、俺の言う事に反論しないでついてきてくれて、貧乏になったらお金かしてくれる子だな」



「都合のいい女を聞いてるんじゃないんだけど」

笑っていたから冗談として聞き流しているもんだとばかり思っていた。それ以前から、カナと連絡先を交換していたけれど頻繁にやり取りしていたわけではなかったし、一番最初に盛り上がった話もジャンプに載ってた漫画の話だった。カナは最初から、さっぱりした女なんだと思い込んでいた。

お金を借りた事はないけれど、カナは女遊びを許容してくれて、俺が言う事に反論したことなんて一度もない。

だけど、

このままカナを追いかける程、俺等の付き合いは情熱的ではなかった。

「……なんだ、カナのやつ」

なんでかわからないけれど“追いかけたら負け”だと思った。そのままバイトに行った俺を、カナはどう思ったのだろう。

あれからメールも電話もしてみたけれど、カナは連絡してこなかった。二日目になると、今度は俺が苛々してきて、連絡してるのに、なんで無視するんだと思い始めた。

だから、1週間の日々が過ぎて大学に行った時、寝耳に水だった。てっぺーがやたらニヤニヤしているのが気持ち悪かったんだけど、その原因はカナだった。

「空知、カナちゃんにふられたか」

おはよう、をすっぱかして言われた言葉がコレだ。俺はあれが別れの現場だったとは思ってない。なんのことかさっぱりだ。

「おはようてっぺー。なんで？」

「は？ 違うの」

「俺は覚えないけど」

「じゃあなんでカナちゃん急にあんなったわけ」

「なにが」

「え、お前知らねえの？」

「だから、なにが」

苛々するなあ、とてっぺーを睨んだらてっぺーはぷつ、と吹き出す。からかわれているようで面白くない。

「見て来いよカナちゃん。俺一瞬誰かわかんなかったわ」

なんだそれ。

本当は走ってすぐにもカナを見たかったけど、それこそ本当に俺は何も知りませんでした、っていうのがバレバレで、なけなしのプライドに負けて行けなかった。ふーん、とだけ返事をして講義を受けるけど、全然頭に入ってこない。

元々今日はカナと同じ講義が次にある。急がなくなつたつて、何  
度も自分に言い聞かせた。

「なあ、空知。お前カナちゃんと別れたわけ？」

教室を移動している間、同じ台詞を同じようにニヤニヤしながら  
つつちゃんが言った。

だから、挨拶は人間の基本だろ！

「おはよう、つつちゃん。なんで」

「ほらー、女が髪切るときって失恋したって言うじゃねえか」

その言葉に俺は驚いた。驚いたっていう感情を表に出さないよう  
に頑張る。

本当は、思い切り動揺してたけど。

あのカナが？

髪の毛を切った？

「ソラチは髪の毛掴むの好きだね」

キスをする時、カナとセックスしてる時、肌にかかる長い髪がこ  
そばゆくて、でもそれを掴むのが好きだった。くすくす笑いながら  
言ったカナが遠く感じる。

「暑くなるからじゃない」

夏はもうすぐ……というには微妙な季節だ。けれども、そんな言  
葉しか出て来ない。

「空知が知らぬ間にふられたのかもな」

くすつと笑う秋生は、だから言ったのに、と続けた。

「鷹野さんがいくらサバサバしてても、女ってことだよ」

そんなこと、わかってる。

わかってたんだ。

俺が一番、わかってるつもりでいたのに、

あんな言葉をかけた、俺が悪い。

「秋生に言われなくてもしってますー。それに、別れてないし」

心の中はぐちゃぐちゃだ。

でもそれを悟られるなんて格好悪い。

カナの元へすぐ行って「暑くなったから切っただけだよ」って言うて欲しい。暑がりなカナのことだから、笑ってそういうに違いな。カナと過ごした2度の夏前は、いつも髪の毛切りたいってアイヌ食べながら言ってたんだ。

早くカナを見たい気持ちと、

見たくない気持ちが入り交じる。

どうして俺は、こんなところでなんでもないフリしてるんだろう。  
それが一番滑稽なのに。

いつ入ってくるかと背中にも目でもつけたい気分になりながら、俺はいつもの席に腰を下ろす。予想に反して、鐘が鳴っても教授が来ても、終わりの挨拶をして出て行っても、

カナは来なかった。

「ほら、やっぱりお前ふられたんじゃないの」

「うるせえ、バカ」

つつちゃんのうざい腕をほどいて、俺はカナの友達居るところへ階段を下りて行く。

「あ、青山君おはよう」

「おはよう木下さん。ねえ、カナは？」

「カナちゃん今日は体調悪いって前の授業の休み時間に帰ったよ」

しらなかった？ と聞かれて苦笑するしかない。ありがとう、とだけ言つて、俺は階段を上がる。

荷物を持つとそのままじゃ、と手を上げた。

「え、空知。この後の授業どうすんの？」

つつちゃんが言うけど、俺は首をふる。

情熱的ではないけれど、このままふーん、で済ますほどには冷めてはない。

「代弁よろしく」

「貸しは高いよ!」

てっぺーの声に俺はおう、とだけ言った。どうせ焼き肉の喰い放題奢れ、程度のもんだ。バイト代が入ったら、いくらでも奢ってやる。

カナの自宅、

カナのバイト先、

二人がよく行く喫茶店、

カナがよく行く本屋。

雑貨屋、

服屋、

漫喫、

カナの友達の家。

どれをあたっても、カナはいなかった。  
もう陽も落ちて、辺りはうす暗い。

「どこいったんだよ、カナのやつ」

これ以上は想像がつかない。

うろうろしていても無駄足だと思った。

「明日は来るかな……」

俺の記憶が正しければ、カナは明日授業のはずだ。

とぼとぼと帰る俺は情けない気持ちでいっぱいだった。  
ダメ男のレッテルを自分で貼って歩く。

鍵を回した瞬間、引こうとした扉は開かなかった。

「は？」

そういえば、部屋の奥で電気が点いているようにも見えなくはない。

「なんで？」

開いていた鍵を閉めた俺は、もう一度鍵を回す。出かける時、多分施錠したはずだ。

「おかえりー」

カナの声に、俺の午後を返せと叫びたかった。

「なんでいんの？」

「いちゃ駄目？」

「いや、いいけど。っていつかどうやって入ったの」

「合鍵くれたのはソラチじゃん」

「そうだけど、はぁ？ え、なに？」

「なにが」

玄関に突っ立ったままの俺と、ベッドの上でジャンプを読んでるカナはちぐはぐな会話をする。カナの見た目に俺は驚いた。

真っ黒だった髪の毛は明るい茶色になっているし、  
髪の毛がボブになっていた。

赤い縁の眼鏡をかけて、  
薄いピンクのカットソーに、短パンを履いている。

ニーハイソックスをはいた足をベッドでパタパタさせていた。

「……なにその格好」

「にあう？」

首を傾けてピースをしているカナだけど、大きく開いた胸元が俺は気になって仕方がない。

なんちゅう露出の高い服を着てるんだ、カナ！！

「髪切ったの？」

「切ったように見える？」

ため息をついてスニーカーを脱ぐと、俺はコックをひねって水を出した。コップを出すのが面倒でそのまま飲むと、カラカラだった喉が潤う。コックを閉める音がやけに響いた。



「どういうこと。切ってんの、切ってないの?」

濡れた口を袖でぬぐって振り返ると、すぐ目の前にカナが居て驚いた。

「うわっ」

ガチャンと俺のベルトがシンクにあたって、金属的な音を立てる。

「女の子っばい?」

にやりと笑うカナが小悪魔に見える。  
俺の首に手を回して、顔を近づけた。

「カナは女だろ」

「誰かさんが、私が男だったか女だったか忘れちゃったっていうからさー」

「……すいません」

「聞こえません」

「申し訳ありませんでした! カナは女の子です。立派な女子です」

よろしい、と言って笑ったカナからは、ヤニの匂いじゃない良い香りがする。

女っばい女は面倒くさいと思っていただけ、これはヤバイ。  
今すぐ押し倒して、滅茶苦茶にしてやりたい。

キスをしようと近づけた俺の顔に、手が伸びる。

「焦った？」

「超焦った」

その返事に満足したのか、カナがキスをする。  
俺はそのキスを激しいものに変えた。

カチャカチャと、カナの眼鏡が当たる。付き合うようになって、  
カナは眼鏡からコンタクトに変えた。その理由はもしかして、なん  
てカナの唇を貪りながら考えていた。

服の裾から手を入れて、カナの胸を触った瞬間、はっと気付く。

「あれ、カナ体調悪いって言ってたのってもしかして……」

「あ、そうだ。忘れてた。ごめん、生理」

まじかよ！

はい、俺生殺し決定。

カナの生理は重い。

薬を絶対飲むし、胸は張るらしくて触ると痛がる。これから一週  
間前後、俺は待てをくらわされるのだ。

「ごめんね」

「……いいよ」

いいよって言うしかないし。

ごめんよ俺の息子。ゴットハンドがなんとかしてやるから、まあ待て。

お詫びにコーヒー入れるね、と全然申し訳ないと思っていない声色で言いながら、カナが台所で湯をわかしていた。

俺は鞆を置くと、カナの背後から抱きしめる。カナの頭は俺のアゴを置くのに丁度良い高さだ。

「危ないっすよー、ソラチさん」

カップにインスタントコーヒーと砂糖を入れながらカナが言う。

カナは砂糖1杯と牛乳。俺は2杯と牛乳。

それはもう言わなくても、カナはずっと前から知っている。

「髪の毛本当に切っちゃったの？」

「私の技術ってすごいでしょ」

質問には答えずにカナが上を向いた。

俺はわけがわからず首をかしげる。

パチンパチンと頭の後ろで何かを外すと、ボブがロングヘアになった。

「……何マジック」

「すごいでしょー、みんなに髪切ったって言われて面白かった」

そのせいで、俺はふられた疑惑を持たれましたけどね！！  
けたけた笑うカナはいつものカナだ。

シャンプーのいい匂いのするカナの頭をくんくん嗅ぐ。

「犬じゃないんだから。臭いよ」

「臭くないよ」

「ふーん」

こぼこぼいい出したミルク鍋の火を止めると、マグカップにお湯を注ぐ。

カナの眼鏡が一気に曇った。

「……おお、見えない」

「あぶないよ」

取手を奪って俺が入れる。

見えないじゃないよ、こぼれて火傷したらどうすんの。

「そういう髪型にしたかったんなら、切ったらよかったのに」

注ぎながらそう言うと、カナは俺の体に思い切り体重をかけて寄りかかった。あぶねえって。おい。

「誰かさんが掴むの好きだから、置いといてあげたのに。切った方がよかった？」

意地悪く笑うカナに俺はお手上げだ。

「……だめ」

短いのも似合うけど、やっぱり長いほうがいい。

茶色い方が、白い肌のカナには合う気がするけど。

「あ、でも俺と居る時はこういう格好もたまにはアリだよ」

「ムラムラする？」

「するする」

その返事にカナが笑う。

考慮したげる、と言ってマグカップ二つを持ってテレビの前の台に置いた。

「あ、ソラチ。冷蔵庫にケーキあるから出して」

「ケーキ？」

「そ。付き合って3年目。これからよろしくケーキ」

そういえば今日は俺がカナに告白をして、付き合い出したした日だ。

あれから、3年になる。

「今年だけ？」

「毎年してるよ」

「ほんと？」

「本当」

それくらい覚えてるよ、と言ったカナは早く、と俺を急かした。  
冷蔵庫の箱は明らかにホールの大きさだ。

そういえば去年も、いきなりホールケーキを買って来た覚えがある。

そうか、あの日が一年前の今日だったのか。

「食えない？」

「去年食べれたから大丈夫だよ」

甘いもの好きなくせして、生クリームが苦手なカナは殆ど食べない。  
俺の明日のご飯は朝・昼・晩、ケーキに決定だ。

いくら甘いもの好きな俺でも、想像しただけで胸焼けする。

「開けるの怖くなってきた……」

「なにそれ」

早くーと体育座りをして待っているカナは子どものようだ。

「それが嫌なら、来年はソラチが用意してね」

そう言って笑ったカナに、俺はへーいと返事をする。

来年は、カナの好きなチーズケーキにしてやろう。

俺の彼女は俺より男っぽい。ただ、女っぽいところもちょっとある。

「あー、お腹いっぱい」

「まだ食ってないし。カナもちゃんと食べるよ」

「ふとるう!」

「太れ、太れ。カナ・デラックスになれ」

「……それでも好きでいてくれる?」

もちろん。ただ、ダイエット指導するけどな。

## 試す女「大学生×大学生：彼女視点」

自分で自分が変な人間だと、ここ数年で何度も思う。

「加奈ちゃん、また土田のバカが合コン合コンって騒いでたよ？  
青山君もさあ、断ればいいのに。加奈ちゃんが可哀想だよ！」

目の前でぷりぷり怒っている木下美樹は、大学に入って受ける講義が沢山かぶっていたのもあって、なんとなく一緒にいる。小動物、という例えがピッタリな背の低い、愛らしい顔立ちをした女の子だ。

「ソラチが行くと、オネエサマ達の出席率がいいんだよ」

「でも、青山君には加奈ちゃんっていう彼女がいるのに。哲平くんだけでも全然出席率上がると思うな」

ソラチの高校時代からの友達だというっペーは、うちの学部では特に人気がある。さわやかな笑顔を無料で振る舞っている、優男だ。

「いいんじゃないの。息抜き、息抜き」

「……加奈ちゃんは、余裕だね」

それから、木下美樹は一時間に渡って付き合っている彼氏の愚痴をこぼした。うんうん、と話の合間に相槌を打つ。



私が余裕？

いつも溺れそうであめいているのに。

新しい出会いの場なんて行かないにこしたことはないし、オネエサンをお持ち帰りなんて聞けば、事実がどうであれ腸が煮えくり返る思いだ。

けど、

それを言ってしまうば、私はソラチに捨てられる。

100%とはいわなくても、捨てられる確率が高いとふんでいる。面倒くさい、と言われて捨てられたら私は立ち直れそうにない。

元々、私は同年代の女子と比べれば淡泊なほうだと思う。

メールも電話も必要最低限だし、

アイドルには興味ないし、

化粧は好きだけど、香水とかネイルまでは興味がない。

ウインドウショッピングは好きだけど、流行を追いかけるのは疲れる。

甘いものは好きだけど、生クリームは苦手だし、

おしゃれなカフェよりも、大衆食堂やラーメン屋の方が好きだ。

家事も裁縫も、どちらかといえば苦手だし、

今流行っている音楽の半分もわからない。

そういう女子は私以外にもいるけれど、少数派だと言うのはひしひしと感じている。

年子三兄弟の、真ん中というせいもあるかもしれない。上に兄、下に弟、男には生まれた女の私は、男勝りのところがあると思う。

ド田舎で生まれて育った私が行った小学校は、全校生徒が両手で

足りるほどで、男女関係なく、森や川や野原で遊んだ。すごく楽しかった。永遠に続けばいいと思っていた。小学校5年生の冬、父親の仕事の都合で都会に引っ越した。そこで、世界が180度変わった。

都会の小学校5年生の女子は、ちゃんと“女子”だった。男の子と外で遊ぶ子は少なかったし、隣のクラスの誰それが格好よくて、好きだなんて話題ばかりだった。バレンタインデーのチョコレートを誰に渡すか、なんて話を田舎の小学校でしたことなど一度もなかった。

衝撃的だった。

同じクラスの気に入らない女子の悪口を言う女の子についていけず、田舎と同じように男友達と遊んでいたら“男好き”というレッテルを貼られた。野蛮で、がさつな女の子だと言われた。

私はふりふりの洋服を着て、給食のカレーが服に飛ばないか心配しながら食べる彼女等を未知の生き物だと感じていたし、そういう女の子になろうとは思えなかった。紙より重いものは持てません、という態度の女の子は顕著に私を嫌っていた気がする。

卒業までの1年は今思い出しただけでも嫌な味が口に広がる。

同じ市内で家を買った両親は、それを知ってか知らずか、中学校の学区が違つところへ引っ越した。その時にはもう“自分がどう思つていようと周りにあわせる”というスキルが身に付いていたし、色々な小学校の出身が集まる中学校だったからか、特に問題もなく、大学進学まで、それなりに過ごして来た。

そんな私が大学に行って好きになったのは青山空知。名前の響きが面白い、と思ったのがきっかけだった。

10人中8人くらいは“かわいい”という評価をするであろう童顔な彼は、最初後輩かと思ったほどだ。座っていたソラチが立ち上がった時の、あの異様なデカさに驚いた。

165センチの私は女子では高いほうだった。けど、その私より頭ひとつちよつと大きい。

童顔なのに長身のソラチは、そういう意味で印象的だった。ちぐはぐで、女の接し方には馴れてそうなのに、同年代や年下にはたじたじなソラチが。

ソラチは私が思っていた以上に年上に好かれる傾向にあった。気になり出したら、周りの女子が「空知くん」という名前を出す度に聞き耳を立ててしまう。誰それと一緒にいた、だの、OLさんと手を繋いでいた、だの、目撃情報がすごく多かった。でもその大半が年上だった。

大学一年の夏前には、二つ上の先輩と仲睦まじく歩いているのを見かけたし、学園祭では、OBの先輩に告白されたという噂も聞いた。

そんなソラチに広大な大学のキャンパスに在籍する私が関わりを持つのは至難の業だ。一年次は学部が違うから接点もなかったし、同じ授業もなかった。それに、ソラチは自分の興味のないことには一切脳が働かないらしい。

同じ学部の女の子が告白をした時、彼女は猛アタックの末告白に

挑んだのだが、名前はおろか顔を見てはじめてだよね、と言われたらしい。

ソラチはバカだ。

人の好意になれすぎて、脳みそバカになっているに違いない。

泣きながら帰ってきた女の子を見て、彼女がふられたことを喜ぶ前に、ソラチをぶんなくってやろうかと思った。彼女が空知と話した回数は、彼女の話によると一度や二度ではない。ソラチに無性に腹が立ったのは、自分とその女の子を照らし合わせていたからだと思う。

すごく印象が良くなっていいからせめて、姿形だけでも覚えてもらいたい。

そう思ったのは、そのことがきっかけだったと思う。大学に居る女の子は、地味か派手かのどちらかだ。派手というと聞こえは悪いかもしれないけれど、流行に敏感でオシャレな女子が多い。

私は可愛くも美人でもない。

黒めがちで、コンタクトがあいにくい目と、焼けたくても焼けない、不健康そうにみられる白い肌くらいは誉められたことがある。後は普通。凡人の私が、ソラチの脳みそにどれだけ踏み込めるか。

それから私は、流行の波に逆らった。カッターシャツにジーンズ。この姿を貫き通した。制服だと思えば、毎日着て行く服を考えなくて楽だったし、カッターシャツも無地とか柄とかあって、集めるとそれなりに面白かった。

髪を伸ばす事にしたのは、兄の「女はやっぱロングヘアだ」と

いう持論からだ。女の私にはロングだろうとショートだろうとどうでもいいのだけれど、兄はロングヘアに女を感じる、と言っていた。それにくわえて、ロングヘアの女を嫌いな奴は少ない、と言い切った兄の言葉を鵜呑みにしたからだ。確かに、テレビを見ていたって半分程のアイドルやタレントはロングヘアだ。

毎日無駄に講義を取って、単位はお陰さまで二年に上がる頃には終わりが見えそうだった。

いちごミルクと煙草、大学図書室の入り口真正面の席、カフェテラスの喫煙席が“いつもの”ものになって数ヶ月後、ソラカナ声をかけられた。

「オネーサン、いつも何読んでんの？」

年上と勘違いされて喜んだのは、この時だけかもしれない。

そこからはじまった私たちの付き合いは3年を迎えようとしている。

ソラチの女癖にうんざりしているし、

そのソラチを誘いまくるてっぺー達にだって苛々する時もある。

メールや電話だって、何度送ろうとしてやめたことか。うっとう

しい女だと思われたくなくて、しつこい女だと思われたくなくて必死だった。

元々の性格も手伝ってはいるけれど、男友達のような感覚でいることが一番ソラチと一秒でも長く、同じものを同じ場所で見れるところに居れる条件だと思っている。

だから言えない。

行かないで、って。

もっとかまって、って。

好きだ、と口にする事が怖い。

私はただ、臆病なだけだ。

だから試す。

ソラチが私を忘れていないか、試してしまう。

それが一番、面倒な女だと自覚しながら。

「久しぶり」

「……それ以外に言う事ないの」

ソラチに言わずに卒業旅行に行ったのはつい一週間前。木下美樹達と、初の海外進出を果たした。はい、お土産。と言ってマトリョーシカを渡す。

「なにこれ」

「マトリョーシカ」

「知ってるよ！」

「聞いた癖になに怒ってるの」

ああ、ソラチが怒ってる。

そう思うだけで私は胸がいっぱいになる。  
これは変態の域だ。

「なんで俺に黙ってたの」

「聞かれてもないのに、わざわざ言うのって変じゃない？」

「……それもそうだな」

「でしょ」

はい、と言って渡したチョコレートにソラチが首をかしげる。

「……ねえ、カナ」

「なに？」

「どこ行ってきたの？」

マトリョーシカとチョコを眺めながらソラチが尋ねる。

「どこって、ハワイ。綺麗だったよ、海とか、空とか、砂浜とか」

「いやうん、いいよ。綺麗だったのはよくわかるけど。マトリョーシカお土産ってなにこれ。ロシア行ったのかと思った」

「露店で売ってたの。ほら、大統領シリーズなんだよ、これ」

「これを俺にどうしろと」

「枕元に置けばいいんじゃないかな」

「……眠れない」

目が合う、とかなんとか言いながら、ソラチはヘッドボードの上に置いた。

ソラチが少しでも寂しいと思ってくれたなら、これ以上嬉しいことはない。

「で、その格好は？」

「ん？ なにが」

格好は、と言われてもハワイ帰りの私は半袖のカシユクルワンピースの上にカーデイガンを羽織っただけの格好だ。冬の日本にいた時、コートのなんと温かいことか。そのコートはさっきソラチがハンガーにかけてくれた。

「ワンピースです」

「見ればわかります」



「……脱げば半袖です」

「そんなことは聞いてません」

じゃあ、なんだよ。

「こういう格好俺は好きだけど、好きだけど！俺が居る時だけにして」

……2度言っただのはなぜだろう。  
大事だからか？

「だって、ジーパン暑いし」

「カナはシャツがいいよ！ うん、カナと言えばシャツだ！」

「意味わかんない」

寒過ぎて頭が凍りはじめたに違いない。

ベッドに寝転んで漫画を読み始めた私に、ソラチはため息をつくと漫画を取り上げた。

「あ、何するんですかー」

「はい、今自分の胸元見て」

ソラチを見上げていた私は自分の胸元に目線を落とす。

……何もないですけど。

しいていうならハワイで女同士お揃いで買ったネックレスがある

だけだ。

「ネックレス？」

「違うし」

じゃあわからん。

「まあいいや。漫画かして？」

「よくない」

そう言つてソラチは漫画をテーブルの上に置くと、私の胸元に手を突っ込んだ。冷たいソラチの手の温度に体がびくつとなる。そのまま胸を鷲掴みされた。

「見えすぎ。お願いだから、そういうのは俺と出かけるときだけにして」

見えすぎもなにも、普通のVネックだ。確かに空知の手が上から入る隙間はあるけれど、開きすぎという程ではない。子どもみたいに拗ねるソラチが無性にかわいくてしかたがない。

「……考慮します」

「善処してください」

まあ、俺心臓あと二つくらい欲しい、と呟いたソラチはそのまま私にキスをしながら覆いかぶさる。ソラチが私の体を触る時、女でよかったと一番思う。

そして、まだ私を覚えてくれていることにどうしようもなく安堵する。

「今度黙ってどこか行ったら首輪つけてベッドに繋ぐよ」

耳元で囁かれたソラチの本音に、嬉しくなる私はきつとやっぱり変態だ。

「大歓迎」

そう返した私に、嬉しそうに笑うソラチも同じくらい変態だ。

## 守宮のお姫様「人外？×社会人」

私が二歳の誕生日に両親からプレゼントされたのは、どこをどう間違ったのか、ヤモリのぬいぐるみだった。

数あるかわいらしいファンシーなぬいぐるみの中から何故それを選んだ！ と、声を大にして叫びたいが、元々一癖ある両親だ。そしてその子供が私だ。色々諦めるしかない。

灰褐色の不鮮明に暗色の斑紋があるそれは、勿論抱いたらふかふかの毛などない。妙にリアルに作られているヤモリは小さなうろこがついていた。背面にある周りより大きめのうろこなど、リアリティを追求すぎだと制作者に一言申したい。まあ、あれを引っ張ってぶん投げるのは大層楽しかったですけれども。それに反してお腹側は頼ずりしたくなるほどすべすべだ。その感覚に、当時二歳の私は酔いしれていた。

記憶はないけれど、アルバムに写る私は、常にヤモリと一緒に満面の笑みでピースをしている。小学校二年生の時に図鑑で“ヤモリは危機を感じると尻尾を自分で切り離して逃げる”と書いてあり、試しに少しだけちゅん切って、綿が出てきて驚いた覚えもある。もちろん再生なんてされないヤモリのぬいぐるみは、母親という名の玩具のお医者さんに縫ってもらうはめになった。

今、改めて見直しても可愛いところは……ごめん、ない。かろうじて目がカワイイ！ とかあればいいのだろうが……ごめん、ない。夜中に目が合うときよっとするレベルだ。

そんなヤモリとの決別を誓ったのはつい数分前。

大方整理の終った荷物は四角い段ボールに入れられて部屋の隅に塔を作っている。義務教育を無事終了し、都会に就職先が決まった私は一人暮らしをすることになった。その荷造りの最中、タンスの上に居たぬいぐるみ群を片付けていたらヤモリが腕に落ちて来て、悲鳴を上げて今に至る。

もうそれは驚いた。

なんせ、クマだのパンダだの愛らしく可愛いオーラを放っているぬいぐるみの中から、やけにリアルなヤモリが腕に落ちてきたのだ。悲鳴のひとつも上げなくなる。

「驚いたー……」

そう言つて腕の中のヤモリを持ち上げて目を合わす。体調30センチ強もある、本当にいたら化け物級のヤモリは、二歳の時には馬乗りになれ、三歳の時にはマドロスの如く台代わりにされ、四歳の時にはプロレスの技を研究するために実験台になっていた。……我ながら、すごい幼児である。

綿が寄っていて、くたついているヤモリはプレゼントされた時のようなハリはない。引越先が1Kということもあり、荷物は最小限にしたかった。もちろん、クマやパンダのファンシーなぬいぐるみ達は置いて行く。

「まあ、ヤモリだし」

迷うことなく元の位置に戻す。連れて行くという選択肢はない。

記憶は薄ぼんやりでも確かに私はこのヤモリが好きだった。最初は変わった形の手のひらがかわいいと思っていたし、兄のようにい

きなり上に跨がって飛び跳ねようともヤモリは怒りもしないし抗議もしない。末子で歳の離れた兄達にやられっぱなしだった分、ヤモリが全力で私の鬱憤を受け止めてくれた。

暴力女と呼ばれ、野山を駆け回っていた過去は軽く封印したい事項だけれど、急に伸びた背と体のふくらみは、片田舎ではお姉さんらしかった。女子には羨ましがられ、男子には冷やかされることもある。ちよつと大人びた格好をすれば、いいなあ、と言われることが快感だったのかもしれない。昆虫採集が趣味で、じいちゃんのおんぼでアメンボ取りが楽しみだった私は、いつからかヒールのある靴を履いて、化粧をすることを楽しむようになった。

そんな私が、間違っても新しい生活の中にヤモリを持って行ける筈などない。

明日には、この田舎から都会へ行く。

引越が終わり、荷物を全て片付け終えたのは三日ほど後だった。誰も知らない土地で生活できるか不安ではあったものの、隣近所の人も優しい感じの人達だったし、一月後には会社も始まる。元より一人で昆虫採集する趣味があった私だ。部屋の中に一人というのは特別苦ではない。

「あれ、まだ残ってた」

段ボールを畳んで紐で縛っていると、二日前に届いたベッドの下に小さな段ボールがあることに気付いた。ドタバタしていて、潜り込んだのを見逃したのかもしれない。

それを引っ張りだして中身を開けると絶句した。

“あなたのパートナーです。忘れちゃダメよ！”

と書かれた紙とともに、ヤモリが入っていた。

この文字は間違いなく母親だ。下手な似顔絵がついているところなど、数十年経っても変わらない。何故か母親は、お母さんよりと書くと自分の似顔絵を書かずにはいられない質らしかった。

「……まあ、一個くらいいいけど」

何故これを選んだ。

と、いつかと同じ感想を抱いた。

それから掃除を済ませ、簡単な夕飯を取り、シャワーを浴びて新しいパジャマに袖を通す。以前ならそこからネットサーフィンに没頭していたのだけれど、如何せんまだ工事が済んでいない。テレビは持つてこなかったのですることがなかったせいもあるけれど、私にしては珍しい時間に眠りについた。

ついた。はずだった。

「んー……」

何かが私のお腹あたりを這っている気がして、寝ぼけながらもそこに手を伸ばす。ひんやりとした感触を気持ちいいな、と思いなが

らその物体を撫でる。撫でているうちにわかったのは、それは人の手のようだという事だった。

……人の手!?

一気に意識が浮上した私はその手を持ってひねりあげようとした。しかし、それよりも早く相手に手を引かれて私の手は空ぶる。

おかしい！ 鍵は全部ちゃんとかけたのに。

そう思って目を開けると、

そこには大層見た目の麗しい妙齡の男子がいた。

「……………あれ?」

「あつぶねー。手、やられるとこだったし」

ベッドサイドの明かりをつけると、灰褐色の髪色の、チャラ……今時なお兄サンが私の上に馬乗りになっていた。色素が薄いのか、私よりも肌が白い。軽い口調なのが大変頂けないほどの美男子だ。

「すみません。退いて下さい」

「嫌だね」

「寝れません」

「って、この状況で寝るか、普通」

「…………夢オチっていう素晴らしいオチが世の中にはあってですね」



と、夢オチについて語ろうとした私の口を、先ほどのひんやりとした男の手が塞ぐ。近づく顔は、こんなところで私を襲わなくても十二分に女子に襲われそうな造作をしていた。

すかさず出した右ストレートは呆気なく受け止められ。使い物にならなくなったならごめん、と思いながらも蹴り上げた足は私よりも細いくせに筋肉があるのか、男の足で挟まれて持ち上げることすら叶わなかった。

「付き合い長いから、めぐのパターンなんて知ってる。俺を置いていこうなんていい度胸してんじゃねえか」

あれ、私名乗ったかなと思ったけれど、こんな美男子と知り合いになった覚えも長い付き合いをしてきた覚えもない。こうなれば手当たり次第投げつけるか、と思ってベッドに放ったヤモリを探した。ぬいぐるみでも、奴は見た目があんなだから驚かせるくらいの成果はあるだろう。

と思つて掴まれていない左手で探してみるも、ない。

枕の横にあつたはずのヤモリは、男がどこかに放ったのか、私の寝相が悪過ぎて壁とベッドの間に挟まれて無惨なことになっているのか、どっちにしろいなかった。

「まさか、俺のこと探してる？」

どれだけ自意識過剰なんだ気持ち悪い！　と言えないのはこの男が美男子だからなのだろう。ああ、美しいとは罪だ。犯罪一步手前を美男子だからと許してしまいそうになる。頑張れ私、目覚めろ私の常識！！

「女漁りは他所でやってくれませんか。私は眠たいんです」

「嫌だって言ってるじゃねえか。俺はめぐがいい。俺に跨がってプロレス技の練習台にするような、俺の尻尾をハサミで思い煩うことなく切り取っためぐがいい」

「……………やっぱり夢だ。うん。これは夢だ」

だってそうでないと、この男はヤモリに違いないということを認めなければいけないということで、それは私の起き抜けの脳みそが全力で拒否をしていた。ありえない。何がありえないって、あの美男子っぷりがありえない。ヤモリなのに、美男子とか何オチ！？むしろギャップ萌え狙い！？　っていうか記憶力よすぎませんか。

「めぐ、起きろよ。せっかく人間になれたのに寝たらつまんねえだろ」

「私は寝ています。話しかけないで下さい」

「……………人間って寝ながら寝てるって言うか？」

お腹の上の重みは全然退いてくれないし、むしろ視線が痛い。私の肌に穴が開きそうなほど見られているのが目を閉じていてもわかる。

「めぐ寝てるんだよね？」

それに返事をしないしていると、遠慮なく冷たい手が私の肌を撫でていく。夜寝る時は、妙に息苦しくて何もしていない胸に辿りつく

より先に私は起き上がって手を引っこ抜いた。何勝手に触ってんだヤモリめ！！ ヤモリのくせに、すべすべした手してんじゃないわよ！

「起きてる！！」

「……なんかこう、通常の反応を求めるのは無粋だとは思ってたけど……めぐって変な奴」

「ほつといてよ。むしろ安眠妨害するな！ 大人しくヤモリつてよ」

「嫌だね。戻れないし」

その一言に、私は目を丸くする。  
今この美男子と書いてヤモリと呼ぶ男は、なんと言ったか。

「戻れない？」

「うん、戻れない」

「綿は！？ 中の綿はどこいったの！？」

「気になるところはそこしかねえのか！」

「そこ以外ないわ！！ ……はっ！ 塩か。塩なんだな。もしくは熱湯か！」

「それはナメクジ！！ 落ち着け。とりあえず俺は湿気で形成されてない！！」

ありえない。最低。夢は夢でも悪夢だ。

落ち着けと言われて両手首を掴んでいるヤモリの手はきちんと五本ある。人間のそれと遜色ないその手は冷たい。

「……百歩譲ってヤモリが人間になったことを認めたとしても、ヤモリは何するために人間になったわけ？」

「え？ めぐの処女を貰いに」

「って何で知ってるの！！」

「だからそこ！？」

ギャー恥ずかしい恥ずかしい死にたい。片田舎じゃお姉さんキャラで色気むんむんで憧れる！なんて言われていた私が処女だと、なぜこの男は知っている、やはりヤモリだからか。いや、ヤモリにしたって知り過ぎている。個人情報保護法はどこにいった！！

「お帰り下さい。出口はあちらです。靴はビーチサンダルなら持ち帰り可です」

「嫌だね。俺はここに住むって決めたし」

「……家賃月100万円になります」

「高っ！！」

「また尻尾……はないのか、残念。足ちょんぎって実験していいのね」

「普通にこええよ。あ、そうそう名前は守る宮ってかいて??」

「まんまヤモリじゃないのよ! ふざけてんの!??」

相変わらず馬乗りになっている守宮を退けようと力一杯胸を押す。ぬいぐるみのヤモリはすべすべしていたけれど、この男はヤモリのくせして固い。その手を、くすりと笑いながら守宮が掴んだ。近付いてくる顔を直視できなくて逸らすと、耳元で低い男らしい声が響いた。

「害虫はちゃんと補食してやるから、大人しく守られる。めぐ」

「みつ……耳元で囁かないで!」

「めぐは耳弱い?」

「ふっ、って言うな。ふっ! って!! こしょばい!」

結局その日、ナニするためにやってきたヤモリとの攻防戦でろくに眠れなかった。なぜこんな危ないものを寄越してきたのだ、母め。こっして少し不思議なんて可愛いものじゃないヤモリの人間版と、私は一緒に暮らすことになったのですが、それはまた別のお話。

## 同棲ブルー【社会人×社会人】

中学一年の春に出会ってから、気が付いたらいつも隣には拓真が居た。

私達の友達同士がカップルだったのもあるけれど、隣に拓真がいることが当たり前で家族の次に気を許せるまでになった頃、拓真は私にキスをした。

友達同士でこういうことっていいの、って聞いたたら、  
気付かないフリはやめたら、と言われた。

告白らしい告白がないまま、学生と呼ばれることがなくなった今でも拓真は私の隣にいる。どこが始まりかわからない私達の関係は、今年で十年を過ぎた。

「一緒に住まない？」

大学を卒業して、拓真は一部上場会社のエンジニアとして就職した。一年の工場研修を終えて戻ってきた時にも一度言われたことがあったけれど、当時私は貯金があまりにもなさすぎて出来ないと思った。

そのまま二年、特別関係も距離も変わることはないまま過ぎて、  
そういえばそんなこと言われたこともあったなあ、なんて記憶がお  
ぼろげになった夏。拓真の住んでいる社員寮　と言っても借り上  
げの賃貸なので普通のマンションだ　のポンコツエアコンが壊れ  
たらしく、拓真の部屋にはやけにレトロな年代者の扇風機が、ブオ  
ンブオン音を立てながら温い空気を混ぜていた。暑さを紛らわすた  
めに買ってきた十本三百円で売っている安いアイスの封を開け、高  
校野球を見ながら頬張っているときに拓真がいった。

「へ？」

「ナナあれから貯金全然増えてないの？」

七つのへその緒の子と書いてナオコと読む私の名前は、拓真は今  
も昔もずっと私のことをナナと呼ぶ。たまに本名忘れてるんじゃない  
かこいつ、と思っていることは内緒だ。

「いや、そんなことないけど」

社会人三年目。貯蓄ゼロなんて銀行窓口担当の名が泣く。

「けど？」

「今更？」

大学在学中には同棲とは言わないでも、半同棲のカップルなんて  
布団をたたけば出てくる埃のように沢山いた。地元を出たことにな  
い私や拓真のような実家組を除けば、付き合って一月もすればそう  
なるカップルが多かった。でも、それは学生だから一緒にいる時間  
が楽しいのであって、社会人も三年目に入った私たちが、何を楽し

むために同棲などする必要があるのだろう。

夜遅くまで残業のある拓真とほぼ定時上がりの私。休みの合う土日はこうして会ったりするだけで十分だと思っっているのは私だけか？

「二年待たされたのは俺なんだけど」

「ああ、そういえばそうか。あの時は飲み会三昧でお金なかったんだよね」

新人歓迎会に始まり、“サークルOB会”と言う名の女子会、就職を機に県外に出してしまう友達の送迎会、と思ったら存外早く辞めて帰ってきて、おかえりなさい会、とまだまだ学生気分の抜けていなかった私と、私の周りの友人たちは、何かあるたびに集まっては飲んで喋ってはしゃいでいた。

今は結婚して落ち着いた友人もいるし、二児の母もいたりする。そういう年になったのだなと報告葉書をもらう度に思うようにはなかった。

結婚。

拓真と？

考えたことがないわけではないけれど、こつも長く一緒にいると改めて結婚する意味がわからない。別に金銭的に困っているわけでも、子供が欲しいわけでも、何か大きな転機があるわけでもない。今がとても心地よいのに更になにか行動を起こす気はあまりなかった。

「今度おばちゃんとおじちゃんの都合のいい日聞いといて」



アイスの棒を口に挟みながら立った拓真は台所に向かう。出会った時は私と同じだった目線は、頭ふたつぶんほど拓真のほうが大きくなった。男にしてはちょっと高かった声も、今では随分低い。

「なんで？」

「なんで、って。フツーに考えて俺があいさつに行くのは筋でしょ」

拓真の言うフツーが普通に思い浮かばなかった私は、あんた私と結婚する気か、と心の中でつつこんだ。同棲って、そんなに気合入れてするものなの？

「別によくない？ 結婚するわけじゃないんだし、もう成人もとうに超えた大人だよ私たち」

「……………じゃあ俺が挨拶したいから、おじちゃんとおばちゃんに聞いいて」

「んー、わかった」

中学校からの付き合いの私たちはお互いの両親に何度も会ったことがある。もちろん兄弟姉妹も知っているし、なぜか墓の場所まで知っている。参ったことはないけど。

「同棲ねえ……………」

テレビの中に居る自分達の後輩は、甲子園の舞台に立つことなく涙をのんだ。相手の校歌斉唱を聞きながら泣いているピッチャーの顔を、私はただじっと見ていた。

夏は、もうすぐ終わろうとしている。

「へえ、でもたつくんのところ寮でしょう？ 独身寮じゃなかった？ あ、今日夕飯食べて帰るわよね。今日はたつくんが来るって聞いてたからハンバーグにしたわよ」

私の母親は疑問系のわりに答えなんて聞いていない。よくもまあ料理を作りながらあそこまで話をできるものだ。なぜか実の母親の作るものより私の母親が作るハンバーグが好き、というのは中学校の時の拓真の文句で、二十五歳にもなればハンバーグ以外にも好きなくせに、訂正せず今に至っている。

「ありがとう、おばちゃん。独身寮だからナナの会社と俺の会社の間取ったところにいい物件あってさ、そこにしようかなと思ってる」

何故か夕方から日本酒を飲んでいる拓真の向かいには、我が家の酒豪、父親がいる。

「そこはその、なんだ、治安とか大丈夫なのか。七緒子の方が早く帰るだろう？ 通勤の便はいいにこしたことはないが、安全の方が大事だろ」

「おじちゃんはそのう言うと思ってたよ。大丈夫、ちゃんと大家さん

が隣に住んでるし、近くに交番もあるから。通学路に面してるし。なんならおじちゃん明日一緒に行く？ 敷金払いに行くから見せてもらえるよ」

ドラマみたいにスーツとか着てきたらどうしよう、と思っていた拓真は、淡いブルーのシャツにチノパンと、普段のＴシャツジーパンより少しだけ小綺麗な格好で現れた。中学校の頃からお互いの家を行き来していただけに、言葉遣いが特別改まっているわけでもなく、小綺麗な拓真が家に遊びに来た程度のことだった。

「ただいまー、ってあれ、たっくんじゃん。何どうしたのついに結婚でもすんの？」

三つ年下の妹は大学生だ。小学校四年の時から顔見知りの三紀子は拓真のことを兄のように慕っている。まだ三紀子が小学生の頃、一度だけ拓真と派手に喧嘩をしたことがあった。拓真が大好きな三紀子は泣きながら私に仲直りしてと言ったことがある。妹の方が拓真のことすごい好きじゃん……と、当時私は、三紀子をなだめながら思った。

二十歳を超えてから、たっくんが本当のお兄ちゃんになればいいなあ、なんて言われたことも一度や二度じゃない。親より私に拓真との結婚を迫っている。

「おかえり、みっちゃん。ちがうちがう、でも一緒に住もうかと思つて」

「えー！！ 同棲？ ねえ同棲？ いいなあ、どこ住むの？ 引越したらいいっていい？ っていうか泊まりに言ってるいい？ いいなあ、あこがれるなあ。あ、もしかして今から宴会？ 和真呼ぶか、

和真。ねえ、たつくん。あたしお風呂入ってくるから和真呼んでおいてー」

三紀子の弾丸トークっぷりは間違いなく母の遺伝だ。しゃべりだしたら止まらない、人見知りをしない愛嬌のある妹だけれど、こっちに返事をする機会を作ってくれないのは些か問題だ。

「三紀子！ 拓真君を使うな。呼びたければ自分で呼びなさい」

って、呼んでいいのか父よ。

拓真にも三つ年下の弟がいる。私と拓真が中学からずっと一緒だったように、三紀子も和真くんと中学からずっと一緒だった。大学は違うらしいが、今でもたまに遊んでいるらしい。付き合ったこともあったそうだが、早々に別れたと聞いたのは高校一年の時だ。

「はぁーい。ねえ今日ハンバーグ？ あたし大根おろしがいいなあ」

「自分でやりなさい」

「ヤダ。だってネイルしてきたばっかだもん。お母さんお願い！」

甘えた声を出しながら三紀子はさっさと自分の部屋がある二階へと駆け上がって行った。

「しょうがない子ね、本当。七緒子、ちょっとおろしてやって」

「はーい」

お皿を出していただけただけの私は母親の隣に立って大根を持つ。その

まま摩り下ろそうとする私を、母親が驚きの目で見ていた。

「ん？ なに？」

「何じゃないわよ七緒子、冗談よして」

「なにが？」

大根を持ってそのままを下ろそうとしている私のどこが冗談なんだろう。ああ、一本おろすのは多いもんね。切れてことが。

「……ああ、そうだね。ごめん、ごめん。ちょっと包丁貸してね」

「そうよねー。させたことはないけど見たことくらいあるわよね。  
お母さん焦ったわ」

「えへへ」

「うふふ」

そういつて包丁を大きく振りかぶって落とした。  
それと同時に母親が短い悲鳴をあげる。

「え？」

「え？ じゃないわよ。七緒子、家庭科の成績そう悪くなかったわよね。いつも調理実習こんなことしてたの？」

「知らないの？ お母さん。調理実習って担当制なんだよ」

「まさか七緒子、あなた……」

「もちろん洗い物担当。包丁って刃物だし怖いじゃない。だからいつも他の料理上手な子がしてくれてたよ」

その言って、切った大根を手にとったところで母親の手が私の手に触れる。下ろし金を左手に持っている私は母親のぞつとした顔を見て、首をかしげた。

「なに？」

「七緒子、ご飯作れるの？」

「作れるよ。私じゃなくて炊飯器が」

「……」

笑顔でいっきつた私に、母親は明らかに安堵のため息をはいて手を放した。

「そうよねえ。今は文明の利器がいっぱいあるものね。大丈夫よね」

「……う、うん。大丈夫だよ。ほら大根おろし作るんでしょ？」

「そうね！ でもその前に皮剥いてね」

「皮？」

そう言っただけ自分の右手にある大根を見る。ああ、白いからわからなかったけれど、確かに固い皮がある。

「じゃあ、はい」

「なに？」

なにじゃないよ。皮を剥くっていったらあれでしょ。

「ピーラー。ないの？」

「……ないわよ。包丁でできるでしょう？ 調理実習で習わなかった？」

「習うけど、調理実習の時は全部ピーラーだよ」

「そう……まあ、できなくても困らないけどね」

そう言うって私の手から大根を取ると母親は器用に大根の皮を包丁で剥いた。料理番組でよく見る、桂剥きだ。名前は知っているが、やる勇氣はない。

「すごいねえ」

「本気で關心してる七緒子が心配だわあ。ちゃんとご飯作れるのかしら」

そう言われながら、私は綺麗むかれた大根をおろした。

「ねえ、たつくん。本当に七緒子でいいの？ この子、料理からつきしょ」

父親と酒を飲み交わしている拓真がこちらを向く。

「おばちゃんの娘だもん、ハンバーグだって、いつかきつと美味く作ってくれると思う」

そう言って笑った拓真に、母親は上機嫌でマシンガントークを始める。拓真の向い側に座っている父親は、お前がきちんと教えてやりなさいと言っていたが、母親に聞こえたかどうかは定かでない。

落ち着かないなあ、と思いながらふと視線を上げると、拓真と目が合う。その顔はいつも通りで、困惑の色が浮かんでいなかったことに、私はすごく安心した。けど、安心したことに驚いた。

それまで、自分が自分であり続けれる場所が、拓真の隣だと思っていた。だから心地良いし、ずっと一緒にいたいと思う。その形がなんであれ、隣にいらればそれでよかった。

ただ、先日浮かんだ結婚の二文字によって、その意識が私の中で変わったのだと思い知らされる。料理が出来て、家事をそつなくこなし、毎日お弁当を作ってあげられる、素敵な奥さん。そういう世間一般にいい奥さんと言われる女を拓真に望まれている気がして、料理が不得意という欠点、人として駄目な点になったように思えた。

拓真の奥さんとして駄目な点。

それが、思いのほかダメージが強くて怯む。

同棲の先にあるだろう結婚が怖い。



同棲をして、掃除も料理も苦手な私が、拓真に失望されるのなんて時間の問題だ。それは怖い。明日私を目掛けて隕石が降ってくると言われるより、怖い。

和真くんも参加してにぎわった両親への挨拶という宴会は、日付の変わる少し前にお開きになった。コンビニに寄ってから帰るという和真くんには三紀子が付き添い、私は駅から電車に乗って帰る拓真に付き添った。帰りが心配だから、と半分の位置にある公園までのお見送り。たった五分の道のりだけど、足が重い。

私は、形のない影を怖れている。

こんなにも、拓真の隣にいられなくなったらどうしようと思ったことは、今までになかった。

「ねえ、拓真」

「なに？」

頬の赤い拓真と私は、もう歩きながら手を繋ぐこともない。それを寂しいと思わなくなったのは、いつからだろう。

「私、頑張るから」

そう言った私に、拓真は何も言わなかった。

言わない代わりに、拓真は私の手と自分の手を絡めた。

数秒前に少し寂しく感じたことを知っていたみたいで、少しだけ悔しかったのは内緒だ。

拓真の隣にいたい。  
だから、頑張ろう。

と、思つて早一週間。

「出入り禁止!!」

入ってくるな、と言いながら母親が目をつり上げておたまを振り回している。拓真が挨拶に来たのだから、あんたも挨拶しなさい、と母親が週明けに言ったのが始まりだった。そこから親同士が連絡を取り合い、何故か我が家に拓真の両親が遊びに来ることになった。

拓真のおばさん達がくるまであと三十分。

この一週間で、私は洗濯物を洗つて、干して、畳むこと。御飯を研いで、釜にセットし、スイッチを押すこと。粉末だしの入ったお湯に味噌を溶くことを覚えた。

何の問題もない。料理チャライ、と思つていたのが悪かったのか。怪我こそないものの、包丁が刺さったままのアボカドと、緑の葉がこんもりと盛られた頂点に君臨するトマトを見た瞬間、母親の沸点が一気に上がった。

「七緒子！ お母さんはサラダを作つてねつて言ったのよ!？」

それは間違いない。

そして私の出した材料も間違つてはいない……はずだ。

「うん、だから、トマトとアボカドと、レタス??」

「これはキャベツ!!」

キャベツと言われて指差されたものは、皿にこれでもかと盛られた緑の葉だ。確かにちよつと固いけれど、バナナの熟れる前が固いように、そのうち柔らかくなるだろうと思っていたのだ。……キャベツ……………ですか。

「ちよつと間違えただけじゃない」

「見た目がつて言うならともかく、切つてもわからないなんて、七緒子馬鹿じゃないの!？」

「実の子に馬鹿とかひどい!」

「実の子だから言つてるのよ、この大馬鹿!!」

それで済んだらよかったものの、次はトマトを握つてこれも、と言われた。

……それか。赤いからトマトじゃないの？

「……トマトだよね」

「トマトよ」

「なんだ、合つてるじゃない」

「丸ごとのつけたサラダなんて見た事ないわよ、切りなさい!」

「切ったわよ、ほら!」

「ここと言って指差したのは、トマトの頭。緑色の部分だ。」

「……ねえ、七緒子」

「なに、お母さん」

「プチトマトじゃないんだから、そこ千切って終わりなわけないでしょう」

「いいじゃない、オシャレよ、オシャレ。斬新でしょう?」

どうにか機嫌を直してもらおうと思ったけれど、母親の怒りは結構大きかったようで、本当に出入り禁止にされた。アボカドの種に思い切り包丁を突っ込んで?あまりに固かったので、全体重をかけたつまな板に叩き付けていたせいかもしれない??取れなくなっ  
てしまい、父親にも怒られる始末だった。

だって、アボカドなんて切られた状態でしか見たことがない。どこに種があるかなんて、想像することすらできなかった。

「こんにちはー」

拓真の声がして出迎えると、中学の時からさほどかわらない、おじさんとおばさんが居た。かわいい七緒子ちゃんと言ってずっと可愛がってくれている。そして、そんな両親の仲の良さが今回は裏目に出た。

同棲の挨拶もほどほどに、私の母親が拓真の両親にこの一週間の惨事と題して、あれやこれやと話してしまったのだ。

「普通見たらわかるでしょう？ 洗濯洗剤って書いてあるのに、この子柔軟剤入れただけで洗ったのよ。もう一回洗うはめになったんだから」

とか、

「米研いで、スイッチ押すだけなのよ？ それに一時間を要するってどれだけ不器用なのかと、自分の子供ながら驚いたわ」

とか、

「掃除機が壊れたっていうから駆けつけたら、電源さすの忘れてたの！ もう本当心配よ、七緒子は。ごめんねえ、拓真くん」

と、洗いざらい最初から最後まで話し切った。

場は失笑と爆笑が混じってよかったのかもしれないけれど、私はあまりの羞恥に拓真の顔を見られなかった。

ごめんね、不器用で。

ごめんね、いい奥さんになれそうにもなくて。

せめて役立つようにと進んで料理や飲み物を運んだものの、会話を途切れさせてしまったり、お皿を配るのもトロすぎて、拓真のおばさんが手伝ってくれた。

せめてと思いながらも慣れないことをしたのがバレバレで、私は自分で自分の墓穴を掘った。掘って、掘って、掘りまくって、ついには身動きできなくなるほどに。

休日出勤の拓真が、九時頃に帰宅の旨を伝えると、神にすぎる思

いで私も席を立った。母親のこの子は不器用という言葉も、拓真のおばさんの、そのうちできるわよという気遣いも、もうお腹いっぱいだった。涙の壺は、もう溢れそうになっている。

「私、拓真送ってくるね！」

たった五分の距離なんだから、という拓真のおばさんの言葉や、気をつけてねという母親の言葉を背にうけながら、拓真の後ろを急いで続く。

拓真が、見送りなんていいよって言わないことが、すごく嬉しかった。

たまたまだったとしても、この場に一人残されることは痛い。今日は三紀子も和真くんもいないのだから、話は必然的に私と母親達になるのだ。飲んでばかりの父親達はアテにならない。

「暑いな」

「暑いね」

夏が終わっても、まだ暑い。

最高気温が二十八度なんて、まだまだ日常の秋は、どんどん空の色を濃くしている。

「なあ、ナナ」

「なに？」

「俺、笑ってるナナが好きだからそんな顔すんな」

普段好きだとか愛してるだとか、ねだつても言ってくれない拓真がぼつりとこぼす。一瞬聞き間違いかと思ったのは、そんな言葉をろくに聞いたことがなかったからだ。

「え？ 今なんて？」

「二回は言わない」

「お願い！ もう一回だけ！！」

「嫌だ。絶対言わない」

服の裾を掴んだり、突いたりしても、拓真はもう一度は言ってくれなかった。言ってくれなかったけれど、心はあたあたかい。気をつかうなんて忘れてしまったのかと思っていたけれど、私は、こうして要所所で慰めてくれる拓真を、その度に好きになつていたことを思い出した。

「ありがとう。時間はかかるかもしれないけど、家事頑張るね」

「いいよ別に」

決意を新に宣言したのに、あっさりと覆されて驚く。隣に居る見慣れた顔を覗き見ると、じろじろ見るなと言って小突かれた。

「なんで？ 料理も、掃除も、洗濯も、出来たほうがいいじゃん」

「俺はそれよりも、帰ってきてナナが俺のジャージ着ながらアイス食って笑ってるほうが安心する。いつものナナと俺は一緒に住みたいんだよ」

「拓真……」

「あ、でもな、俺のジャージ着るのはいいけど、ナナ襟元きついつて伸ばすだろ。俺着たらヨレヨレなんだけど」

あの癖だけはどうかして、とお願いされて私は決壊した涙をぬぐいながら首を縦にふる。

拓真、隣に居ていいかな。

私ばかりにずつと笑うことならできるから。  
毎日だってできるから。

「……ごめん。でも襟元伸ばすのはやめられないと思う」

鼻をすすりながら言う私に、拓真は頭を撫でながら苦笑した。

「じゃあナナは、ナナにあったジャージ買って。俺、首さむい」

「やだ。拓真のがいい」

「なにその嫌がらせ」

「違うの。拓真の着てると、拓真のにおいがするんだもん。自分のじゃダメ」

まるで子供のように手を繋がれながら、私はこぼれる涙をすくってはこする。気持ち悪いと言いそうな拓真が何も言ってこないの顔を見ると、呆然と私を見る拓真と目が合った。



「……………どうしたの？」

「……………なにもない」

何もないと言いながらそっぽを向いた拓真の耳は赤かった。久しぶりに照れる拓真を見て、私は微笑まずにいられない。握られた手を強く握ると、拓真もぎゅっと握ってくれる。

それだけで、私は幸せだ。

「ねえねえ、拓真。たまにはさ、こうして手繋いでデートしようよ」

「嫌だよ、気持ち悪い」

「ひどい！」

もうすぐ別れの公園前。

来月拓真の背中を見送る時は、いつてらっしゃいつて言うからね。

## 夢見がちな女と伝わりにくい男【社会人×社会人】

私の視界は、常にたゆたんでいて一向に晴れることはなかった。

だって、何度見ても綺麗なんだもの。

何度見てもカッコイイんだもの。

ずっと夢見てきたこの瞬間に、泣くなと言われる方が無理だった。

「……ミーク泣き過ぎ」

「うるさいなあ、今日はいいの」

三つの紀州の子と書いてミキコと読む私の名前を、ミークと呼ぶのは今も昔もずっと目の前の男だけ。たまに本名忘れてるんじゃないか、と疑うことがあるのは内緒だ。

挨拶を兼ねてお酒を注ぎに回った両親の席に、大変偉そうに座った“親戚”を見つめる。自分の見た目が派手で、よく女にモテることを知っている私の親戚。

「だって、たつくんはカッコイイし、お姉ちゃんは綺麗なんだもん」  
ぐずつと鼻をすすりながら、ハンカチで押さえるように涙を拭く。  
お色直しに出て行った二人がいなくなった会場は、談笑とスクリーンに映し出された二人の写真を見て、時折派手な笑いが響いているだけだ。

中学生くらいになると、別々だった二人の生い立ちがぴたりと重

なる。中学生時代というテロップが出た後、一年の運動会で、二人は何故か互いの鼻に全力で鼻フックしている写真が映し出された。……数ある写真の中からこれを選ぶ二人のセンスが、私は好きだ。例え、おばあちゃんが目をひんむいていても。

十一年。お姉ちゃんとたつくんは、中学校の頃からの恋を大事に育てて、今日の日を迎えた。同棲一年を迎えた頃、同棲しますと言いに来たたつくんは、結婚しますと言いに来た。その頃、お姉ちゃんはやつとハンバーグが作れるようになったところで、けれども完成するまでに四時間かかると愚痴っていた。

……普通にかかりすぎだし。四時間お姉ちゃんは、一体何をこねているのだろう。

私は嬉しかった。

二人の恋が実って。

自分が出来なかったから。

憧れているばかりで、私にはそういう大事にしたい恋に出会ったことがない。

お姉ちゃんとたつくんは私の目標で、いつも羨望の眼差しで二人を見ていた。漫画みたいな小さな奇跡が目の前にあったのだ、憧れ

るのは当たり前だ。

丁度いいことになつくんの弟も私と同じ歳で、これで私と和真が付き合えば、それこそ漫画みたいなお話じゃないかと、その状況にときめいた。中学生だった私の目の前にきらきらと光ったガラスの靴が見えた気さえする。その勢いにまかせて、和真に告白したことがあった。

お姉ちゃんがたつくんといると同じくらい、当時中学校二年生だった私と和真も同じ時を過ごしていた。なんとなく付き合って、なんとなく一年が過ぎ、なんとなく二年目を迎えた。

けれどもそれは、私の憧れでしかなく、  
和真にとっても、彼女という名のアクセサリーでしかなかった。

高校生になって急に大人になったような気がしたのは、私だけではなかったらしい。

手と手を握り合うだけの関係から、  
唇と唇を合わせる関係になり、  
そのまま欠けたものを埋める関係になるのも、崖から転がるように早かった。

そして、関係の終わりも同じように時をすべる。

嬉しい筈の行為は、ただただ空しいだけで、  
それをお互いが感じてしまった。

手と手を握り合うだけでは錯覚できていた想いは、深く繋がった  
ことで嘘だと知る。

恋に恋をしていた。

私は、お姉ちゃんとたつくんのような恋を、自分と和真で実践しようとしていただけ。和真は、アクセサリーでは、心の隙間を埋めてくれないと気付いただけ。

二年も続いていたのに、と言われた私と和真の交際は、高校一年の夏に終わった。

それだけだった。何も残らなかった。

その和真は、今、私の目の前に義兄の弟として座っている。  
豪華な室内に劣らない、中学の頃より大人びた和真。

今でもたつくんが家に来れば、私は話し相手がいなくなるので和真を呼ぶ。面倒くさそうに返事をする癖に、それでも訪ねてくる和真の優しさに、私は甘えきっていた。

だから、和真の言った言葉が一瞬何を言っているのかわからなかった。

「俺も、結婚しようかな」

お姉ちゃんとたつくんがさっきまで座っていた高砂を見て、和真がこぼす。

私と別れてから、和真が女子をとつかえひつかえしているのは知っていた。それに傷つくことなんて一度もなかった。私だって、カツコイイ男の子に告白されたら、“いつか好きになるかも”なんて思っただけ合っただけは別れることを繰り返していた。そのまま高校、大学と一緒に道を歩んだけど、男と女として交わることがなかった。

就職先はさすがに別々だったので、この一年、和真がどういう生活をして、どういう人と出会って、どういう想いを抱いてきたのかは知らない。

それこそ、私は和真と別れてから、和真の一切の感情なんて理解できない立ち位置に居た。

私が大事にしたい恋を見つけれない間に、和真はそれを見つけたらしい。そのことに対して、先を越されたという悲しみや悔しさとは違うものがこみ上げた。

「……………結婚式見ると、結婚したくなるよね」

誰と、とか、私の知ってる人、とか、聞きたいことは幾らでもあった。でも、それは全部飲み込んだ。一筋こぼれた涙の意味が、自分自身でもわからない。和真が、お姉ちゃんとたっくんに感動して泣いていると勘違いしたままできてくれと願うしかなかった。

私は何が悲しいのだろう。

何がこんなにも痛いのだろう。

和真を利用するだけしておいて、好きだなんて言う資格があるとも思っているのだろうか。私の恋愛ごっこに気付いておきながら、甘んじて受け入れてくれた和真を、これ以上振り回してはいけない。

?? ミーコは楽しかった？

別れの夏、最後に聞かれた言葉を思い出す。  
楽しかったと答えた。

だって、私が望んでいた、お姉ちゃんとたっくんのような恋だった

たもの。

それを見透かしていたのに付き合ってくれていたのだと、気付いたのは随分と後だった。

和真は知っていた。

口は悪いし、意地悪だし、平気で人の頭殴るし、優しいばかりじゃなかったけれど。和真は優しい。

クールでカッコイイなんて言われている和真じゃなくて、ドラマで犬が死んじゃうシーンとかで、静かに涙を流す和真の優しさが、私は好きだった。

たつくんとは違う優しさ。

そこだけは、ちゃんと私も現実を見ていたと、今でもはっきり言える。

「ミーコと結婚してくれるような物好きいんのかよ」

悪そうな笑みを携えて、和真が私を小突く。

結婚式の前に会ったのは、お姉ちゃんがたつくんを連れて“同棲宣言”したあの日以来だ。

「世界中のどこかには、そういう物好きも居るわよ。和真こそ?」

そんなに口が悪くて、態度も大きくて、がさつで、脱いだ靴下は丸まっていて、放っておけば万年床の布団で寝ちゃうような和真と、結婚したいと言ってくれる物好きなんているの?

そんな風にこぼれそうになった口を縫い付ける。

どの口で、どんな顔で、私は和真に言うつもりだったのだろう。

わかったふりのくせに。

まだ和真に近いのは私だと思いたいなんて、滑稽な想いを暴露する気か。

「なんだよ、途中でやめんな」

「なんでもないわよ。よかったわね、そういう相手が居て」

おめでとう、とは目を合わさずに言った。

司会進行の人が、そろそろお姉ちゃん達が帰ってくる旨を言い始めたので和真はそのまま自席へと戻る。

空になったビールの瓶を持ちながら帰ってきた両親の、刻まれた皺をまじまじと見た。

結婚。

誰と？

初恋の相手はお姉ちゃんと結婚した。

付き合った男達は私に優しくしてくれたけど、ただ、それだけだった。

欠けたものを埋められない私は、高校一年の夏からちつとも成長していない。

大人ぶった仕草で誤摩化して、恋愛なんてと強がることを覚えただけ。

我が儘で、気分屋で、口うるさい。



そんなありのままの私を受け入れてくれる人なんて??

「……いないのかも」

だって私が受け入れられない。

少しでも思っていた人と違ったら、途端に恋が冷めてしまう。

口が悪くて、態度も大きくて、がさつで、脱いだ靴下は丸まっていて、放っておけば万年床の布団で寝ちゃうようなところを見ると、他の男では引いてしまうのだ。

最長記録は和真との二年で、  
他の素敵な男の子達と、私は一年ともったことがない。

「なあに？ 何か言った？」

黒い留袖を着た母親に尋ねられる。

ごめんね、お母さん。お父さん。

娘が結婚をして、孫を見せてもらうことが親孝行なら、  
私はもつとずっと先のこともしれない。

もしかしたら、生きているうちに間に合わないかもしれない。  
親不孝な娘でごめんね。

「なんでもない、ほら、お姉ちゃんたち来たよ」

開かれた扉の向こうに、幸せそうにはにかむお姉ちゃんとたつくんがいる。

綺麗。

とても綺麗。

眩しくて、思わず目を瞑ってしまう程に??

「二次会？」

「そう。三紀子も来るでしょう？ 会場はこのままここだから。二時間ほど時間潰さなきゃいけないけど、これ、ラウンジのチケット。ここでお茶でもしてて」

参列者を見送り、同じように二次会に出席するらしいお姉ちゃん  
とたつくんの親友達に囲まれながら、お姉ちゃんの手短に言ってチ  
ケットを私に渡す。私が口を開く前に、そのまま違う人のところへ  
行ってしまった。

本当なら喜んで参加するのだけれど、正直気が重い。  
明るくて、いつもはっちゃけている七緒子の妹。

その肩書きを背負うには、私も徐々に大人になりつつあった。  
毎日が面白いことだけで溢れているのではないと、社会に出れば  
嫌でも気付く。

それまでの恋の些細な悩みや、レポートの期限なんて軽いものに  
思えるくらい。

手に握られたラウンジのチケットを持って、私はエレベーターの

ボタンを押した。

二階のラウンジには、黒いスーツと華やかなドレスが離れた場所でそれぞれに談笑している。一目で年上と分かるその人達は、お姉ちゃんやたっくんの会社の人なのだろうな、ということはすぐにはわかった。

高校生の間までなら、少なくとも顔くらいはわかる。

ずっとお姉ちゃんの背中を追ってきた私の人生は、お姉ちゃんの交友関係がそのまま影響していた。三歳差の兄弟姉妹は、世の中にありふれている。

ラウンジに入ってチケットを渡すと、好きな席へどうぞと言われる。

一人でいるために迷っていると、カウンターに座る和真を視界に捉えた。

そのまま、和真とは反対の一番端の席に腰を下ろす。

適当に飲み物を頼むと、そのままパンコールの沢山ついた携帯とハンカチくらいしか入らない鞆の中から、携帯を取り出した。

昔は、一人ぼっちだと手持ち無沙汰ですることがなかった。

今は、携帯という便利なもののお陰で、一人の暇つぶしにも時間は気にならない。

「お待たせ致しました」

そう言って運ばれて来たカクテルを見つめてお辞儀をすると、また携帯の画面に視線を戻す。何かの気配がしてまた顔を上げると、そこには和真がいた。

「……なに？」

「ミーコのくせに、いつ携帯変えたんだよ」

私のくせにとか、そういう口の悪いところ直したら？  
いつもならそう言うけれど、今日は言わない。

それを言うのは、私の役目じゃない。

「この間」

「なんで？ まだ新しかったじゃん、ミーコのやつ。しかも俺と色チだし」

「だってさー、和真の携帯みたらスマホ欲しくなったんだもん」

ささくれた心に蓋をして、なんでもないように装うのは得意だ。  
二人姉妹の妹は、可愛がられ慣れているし、可愛がられる術を知っている。

「真似ばかりだな」

「いいじゃん、可愛かったんだもん、このピンク」

嘘。

本当は、和真が携帯変えたから変えたの。  
いつまでも遠いようで近い昔馴染み。

くだらない電話も、メールも、律儀に返してくれる和真のことを、

男とか、そういう分類でなく好きでいることは確かだ。男と女として交わらないことを知っていても、和真を手放すことなんてできない。こっそり携帯を機種変更して、色違いを買ってしまうことで、満足できる私の名前のない想い。

「ミリーコに自慢するんじゃないかった」

「残念でしたー」

お気に入りだったピンクの携帯。  
今は持っていることさえ恥ずかしい。

彼女が居る時は、誘っても和真は私と会わない。  
電話も出ないし、メールもそっけなくなる。

だから油断していた。  
今は別に大丈夫だろうって。

もし、和真が結婚したいと思っている彼女が、私と同じ色の携帯を持っていたら。

私は穴を掘って埋まりたい。

「なあ」

「なに？」

「これ、やるよ」

手をグーにしたまま、和真が私に手を差し出す。首をかしげている。

ると、手。と言われた。

手を出せ。

それくらい、ちゃんと言いなさいよ大雑把だなあ。

「飴のカスとかだったら、いらないよ」

「余計な事言つてないで、手」

押しの強さに負けて、手のひらを和真の拳の下に持つて行く。  
小学生の頃から、何度もあった同じシチュエーション。

時には飴のカスで、

時にはせみの抜け殻だった。

時にはコンドームを差し出してきてからかって、  
時にはお揃いのケータイストラップをもらった。

付き合っていた時の、最初で最後のプレゼント。

和真が私にくれたものは、ケータイのストラップだけだった。

和真の気持ちも、それ以上の関係を期待できるようなプレゼントも、何もなかった。私の乙女がちな思想に少しだけ寄り添ってくれた和真。

「大事にしるよ」

そう言つて私の手のひらに何か置くと、ゆっくり和真の手が離れる。

私の手のひらに残されたものを見て、息が止まるかと思った。

つい何ヶ月か前に、私がたつくんに見せたものだった。雑誌に載っていた指輪の中に、お姉ちゃんの好みそうなものがあった。だから、こんなのもいいんじゃないって、たつくんの家にあがりこんで見せた覚えがある。同棲した時から結婚するものだろうと思っていたし、たつくんも雑誌貸して、と言って喜んでいた。男兄弟のたつくんの家では異色だろう、女性向け雑誌。

私が貰ったっいたらこれがいいなあ、なんて眺めていたものが、今手のひらにある。

「……………なんで？」

冗談にしては物のチョイスも値段もすぎる。

そして、そんな冗談、私の知っている和真はしない。

「返品不可だから」

「疑問の返事になってないんだけど」

私と和真は付き合っただけなんかない。

付き合ってたことはあっても、それぞれ別の道を歩んでいたはずだ。

「私と結婚するような、物好きはいないって……」

泣くな私、と念じていても涙腺は言うことを聞いてくれない。

こぼれる涙を、和真の親指が雑に拭いた。

「俺以外ないって意味。っていうか、ミーコはすぐ泣く。ブスに

なるぞ」

「ブスにしてんのは和真じゃない……こんなの、私、だって……」

言葉にならなくて詰まる。差し出されたハンカチをそのまま受け取って、優しく頬を撫でる和真の手に、私の堤防は大きく決壊した。

どうして？

いつから？

「ミーコが言ってたんだろ」

私が？

そう言われて、高校一年の夏、と和真が言ったところで思い出す。それは、ブラウン管のテレビに映った高校野球を見ながら、和真の家でアイスを食べている時のことだ。その時、私は雑誌をみていて、和真はテレビを見ていた。

「ねえねえ、和真。これみてー」

「なんだようぜえ、俺テレビ見てんだけど」

実況中継が、四番バッターの名前を読み上げる。甲子園常連校らしいのだが、私にはさっぱりわからない。和真は今いいところだから、と私を突っぱねた。

「もー、ほんと和真ってばそっけないよね。モテないよ」

「彼女持ちがモテるわけねーだろ」



「えーでもお、たつくんとかモテてんじゃん」

「しらねーよ、兄貴と比べんな」

むすつとした和真は、それで何？　と言つて私の持っていた雑誌を覗き込む。投稿者から寄せられた、彼氏彼女のあれこれの特集したものだつた。結婚しました、という題名で載せられた、とある恋人達の話が指差す。そこに和真の視線が注がれた。

「……ありえねーよ」

「そんなことないつて、運命つて絶対あるよ」

「ばーか。一回付き合つて別れた時点で終わりだろ」

「そこから長い年月を経て、もう一回付き合つて、結婚するっていうのがドラマチックじゃない」

「はいはい、ミーコの頭は今日もわいてんな」

ドラマみたいな、漫画みたいな、お話の中みたいな、恋。

それに憧れるだけなら、誰にも迷惑かけないでしようと、私は言つた覚えがあつた。

その恋人達の再会のきっかけは、友人の結婚式。

そこで会えるとわかつていた旦那さんが、奥さんへ指輪を渡したのだそうだ。

結婚式と二次会の際のプロポーズ。

長い年月、想い合うなんてなんて素敵。

「ぜってーありえねーって」

「でも、こうして載ってるんだから、現実でしょ？ 和真ってば夢がないなあ」

「ミーコは夢見過ぎ」

「いいじゃん。夢見たって。プロポーズくらい夢みたいよ」

その会話の一週間後、私たちは別の道を歩くことに決めた。

そんなこと、私は和真に言われるまで忘れていた。

「え？ でも、和真それから何人も彼女いたじゃない」

「ミーコも彼氏居たな。しかもあんまり続かない軽そうな男ばっか」

見た目だけでいえば、和真も負けては居ない。

女に軽そうで、自分はおもてると知っている男。こんなプロポーズを絶対しなさそうな男。

「……なんで知ってんのよ」

「知られたくなかったら、変なマフラー音たたせるような男と付き合うなよ。うるせーし、近所迷惑」

その近所に住んでいるのは知ってはいたものの、そこまで和真が私に興味があることにも驚いた。別れた時点で、興味なんてないと思っていたのに。

「きもーい、ストーカーみたい」

「だろ。だから観念して、俺と結婚しろよ。こんな回りくどいことしてくれんの、俺くらいだぜ」

「……和真ってずっと私のこと好きだったの？」

有り得ない。

色々有り得ない。

「いや？ うるせー奴としか思ってたない」

「ひつどー!」

しれっと五月蠅いとか言う奴が、本当に何故こんな回りくどいことをしてくれるのか。質の悪い悪戯だと罵ったほうがいいのか、騙されたフリをして受け取るのがいいのかよくわからない。和真の望んでいる返事は、何なのだろう。

「ただ、俺、結婚するなら一緒に居て気が楽な奴がいいんだよ。ミ  
ーコならしてやってもいいかなって思っただけ」

そう言いながら顎をかく。

恥ずかしがっているときの、和真の癖だ。小さい頃から変わらない。

ストーカーとか言って肯定しちゃう、危ない彼氏も旦那もごめんだけ。

「ま、あの汚部屋を文句言わずに片付けてくれるのも、私しかないか」

「嘘付け、文句たらたらじゃねえか」

「文句のひとつも言いたくなる部屋だってことよ」

「じゃあミーコが片付けてくれりゃあいいじゃん」

「当たり前だし。私言っとくけど綺麗好きだよ？」

「知ってる。昔からじゃねえか」

ちゃんとはめとけ、と言って私の左手薬指に指輪をはめると、和真は恥ずかしそうにそっぽをむいた。

「こういう時はさあ、嘘でもいいから好きとか言えばいいのに」

「はあ？ 調子乗んなよ」

「またまたあ、私のストーカーなんでしょ？」

にやにやしなからスーツの裾を持つと、やめろと言って和真が振

り払う。

「やっぱりやめる、ミーコ指輪返せ」

「返品不可です」

うふふと言って笑うと、和真は心底嫌そうな顔をした。

本気で伝わりにくい和真の気持ち、これから私はどれだけ気付けるのかな。

毎日うんざりするほど??普通にうんざりって言われた??のメルも、深夜に突然かかってくる鬱陶しい??普通に鬱陶しいって言われた??電話も、付き合ってた女にすらない。ミーコだけ。

と教えてもらったのは、また別の日のことだった。

お化け屋敷へようこそ【幽霊×幽霊】

「え？」

「ですから、ここは人外専門です」

その言葉に、僕の脳は現実逃避を始めた。  
空耳かもしれない、もう一度聞いてみよう。そう思つのも無理はないと思つんだ。

「あの、仕事が欲しいんです。普通の」

「ええ、どれも普通ですよ。おたくの場合でしたら山奥の廃墟なんていかがですか？」

「いえ、普通の??」

戸惑う僕に目の前の職員は、かけらもにこりとせず言い放つ。

「普通のお仕事ですが、何か？」

そう言いながら、くいつとあげられた黒斑眼鏡の職員をじつと見る。指サックをしながら書類をめくり、面倒くさそうに僕を見上げる男。戸惑う僕。

一体全体、なんでこんなことになっているんだ。

抱えようと手を頭に持っていた瞬間、また、自分の前に手が現れる。まるで“頭なんてなかった”かのように舞い戻った手のひら

を見て、僕は思い出した。

僕は、昨日死んだ。

最後に覚えているのは、暗い山道で突然出て来た鹿の、ライトに照らされて不気味に光った真つ白な目。

「幽霊にとつての普通の仕事というのは、大抵こんなものですよ」

よく見ると、職員の口からは二本の前歯が付き出し、横に長いヒゲが何本か鼻の下から伸びていた。もっさりとした頭の中には丸い耳があるのではないか。僕がそう想像していた瞬間、少々お待ち下さいよ、と言つて席を立つた職員のおしりには、ネズミのような尻尾がついていた。

吐き気がする。

僕は、“人外ハローワーク”と書かれた看板の下で、出るはずのない胃液を飲み込んだ。

「あの、すみません」

戻ってきた職員に声をかける。

もし、僕はあのまま、ブレーキが遅れて、もしくは踏んだもののスピンしてガードレールに突っ込んで落ちて、死んだでしょう。

だとしたとして、何故ハローワーク。

死ぬ気で働けと言われたことはあるけれど、死んでも働けなんて酷じゃないか。

「なんでしょう」

「ここは、どこですか？」

「ハローワークですよ」

「あ、いえ。そうじゃなくて、場所はどこですか？」

そう尋ねた僕に、目の前のネズミ職員は首をかしげる。質問の意味がわからない首のかしげ方ではなく、何故そんな当たり前のことを聞くのか、と言いたそうな首のかしげ方だった。

「どこでもない場所ですけど」

「どこでもない？」

「はい。どこでもない場所三番地、右奥の斜め上です」

その回答が斜め上です、と言いたくなるのをぐつと答える。何故住所に斜め上。

「そう……ですか」

「ええ」



見慣れたオレンジ色の指サックで、ネズミ職員は紙の束をぺらぺらと捲る。生きている頃は、僕もオレンジ色の指サックはすごくお世話になった。営業事務という、営業の人達がスムーズに動けるようにサポートする立場だった僕は、毎日書類を捌き、営業のプレゼン資料をまとめる日々だった。営業の人達にクソカス扱いされてたけど、負けるものと歯を食いしばって耐えてきた。

男が一度勤めた会社をやめるなんて、男をやめるのと同じだ。

なんて言っちゃう頑固な昔ながらの親父のお陰というおうか、僕はずっと皆勤賞だった。どれだけ理不尽な言葉を浴びせられても、仕上げた資料をそのままゴミ箱に放り入れられても。

僕が、男であり続けるために。

「ああ、ここなんてどうです？」

過去の記憶に思いを馳せていた僕は、ネズミ職員に小突かれて前を向く。差し出された資料を見て、思わず僕は目が点になった。…今、目があるのかどうかすら疑問だけど。

???

勤務地：日本の真ん中あたりの遊園地、“前代未聞！お化けも怖がるお化け屋敷！！”敷地内

勤務時間：開園から閉園まで。閉園後も残る場合は、巡回の警備員を脅さないこと。

時給：人の生氣（実体のある場合、日本円で730円 試験期間内は700円）

条件：初心者可、実体のあるなしは問いません。現在募集してい

るのは、若い男の幽霊、首無し女、狼男（変化できる方のみ）言語は日本語のみ。会話の難しい方はご遠慮下さい。

???

「お化け……屋敷ですか」

「ええ、おたく幽霊ですしね」

あんまりにもあつさり言われると、なるほど、なんて納得してしまふ。先ほど見せられた公衆便所や廃墟の募集要項より、屋根付きな分いいかもしれない。

?? いいかもしれないって、僕は本当に死んで頭の回路がいかれてしまったのかもしれない。もしくは、いかれるような頭の回路を持ち合わせていないのかもしれない。

幽霊になった心当たりならある。

何故だか働かなければならならしい、というのは今の状況でよくわかる。

それならば少しでも条件の良いところに、と願ってしまうのは就職氷河期を痛いほど味わったからだろうか。

「じゃあ、これで」

「はいはい。えーっと、ああ、どうしようかね」

長いヒゲを指でひっぱりながら、ネズミ職員が眉間に皺を寄せる。

「どうかしたんですか？」

「いやねえ、おたくの实体申請、どちらにしようかと思ひましてある、か、ない、かしら選択なくてねえ」

何のことがよくわからなくて、曖昧な返事を返すと、ネズミ職員は「实体：ある・ない」と書かれた紙の「・」の部分丸で囲った。……なんだろう、この適当さ。

「先方についたら、おたくが自分で半透明ですって言うておいてくださいね。見たら分かると思うけど」

そうとってつけられた言葉によって、僕は僕が半透明だということを知った。

言われた通りのバスに乗って外を眺める。お化け屋敷につくまで外は真つ暗だった。何分乗っていたのかもわからない。幽霊だから時間の感覚が鈍っているのかもしれないけれど、早かった気もするし、遅かった気もする。

おかしい夢なのかもしれない。

実は植物状態で、だから僕は半透明なのかもしれない。

お化けにも定年があつて、そこまではがむしゃらに働かなければならないのかもしれない。

沢山の“かもしれない”を考えて、それでも出ない結論に僕は考  
えることを放棄した。考えたところで、僕はお化け屋敷に行くしか  
仕様がなく、それ以外に残された道はない。半透明な分、賃金が実  
体の半分貰えたらいいな、と思うことくらいしか、希望らしい希望  
は思い浮かばなかった。

「お待ちしてましたよ！ ようこそお化け屋敷へ」

お化け屋敷の前でバスから降りた僕を待ち受けていたのは、“山  
田家之墓”と書かれた墓石だった。どこが目でどこが口かもわから  
ない。少しだけ浮いている山田家の墓は、枯れた花が一輪刺さって  
いた。妙に高い声が、僕の耳をくすぐる。触れないので、あるかど  
うかはわからないけれど。

「あ、あの山田さん」

山田家と書かれている墓にそう声をかけると、墓石がぐるぐる回  
る。“山田太郎 建”と書かれた部分が僕の目の前に止まった。

「私の名前は権田原です。今度から権田原、もしくはゴンと呼んで  
ください」

むっとした声が“山田太郎 建”から聞こえてくる。

果たしてこれがツッコミ待ちというもののなのか、本気なのか、判  
別がつかない。何せ相手は墓だ。しかも思い切り山田と書かれた墓  
だ。全国の山田さんと山田太郎さんに、何故だか申し訳ない気持ち  
になる。

僕も、元鈴木としては、権田原のように複雑な名前に憧れた時期  
もある。

あるけれど……やっぱり山田さんとしか呼びようがないと思っ  
てしまうのは僕だけだろうか。

「ああ、はい」

「で、あなたは？ 何と呼べばいいですか」

そう尋ねられたので、僕は僕の名前を告げる。

「鈴木健太郎です」

「プッティーですね、わかりました」

「いえ、鈴木けんたろ……」

「プッティーの待機場所は井戸の中をお願いしますね、あと、浴衣  
の着方わかりますか？ わからなかったら、適当に着て下さいね」

山田さん改めゴンさんは人の話を聞いていない。どうしても僕を  
プッティーと呼びたいらしい。

「はあ……。あ、あの、僕、鈴木と言んですが、半透明なんです  
けどいいですか？」

言えと言われていたことを思い出して、真っ直ぐ前を向く。  
ゴンさんは“山田家之墓”を僕の方へ向けて、しばらく黙った。

「……そんなもの、見ればわかりますけど」

「……そうですね」

「プッティー、しっかりしてくださいね」

鈴木健太郎のどこを取ればプッティーになるのか考えながら、僕は井戸の中へ入った。

第二の僕の仕事場は、暗くて湿っていて、蜘蛛の巣がはつていただけで、ちつとも臭くなくて、ひどく落ち着いたのは僕が幽霊だからだろうか。

足音がしたら飛び出す。

第二の僕の仕事は、ただそれだけだった。正方形の窮屈だけ安心する狭さの井戸から、できるだけ素早く姿を現す。ただ、それだけ。

開園しているのか、していないのか、それすらもよくわからない。バスから下り立った時は青空が見えたような気もしたけれど、あれからどれだけ時間が経ったのかもわからない。

今までにしておけばよかったと、なんてくだらないことを考えながら、僕は足音が来るのを待った。

僕の担当していた三人の営業さん達は、皆短気だった。書類が揃わないと怒って、仕上げたものを寄越すとかさ張ると怒る。八つ当たりもしょっちゅうだった。それにずっと歯をくいしばって耐えるだけじゃなくて、嫌なら嫌だっってはつきりいうことも大事だったな

と思う。本人を目の前に言える性格じゃないのはよく知っているから、人事部にかけあつて部署移動をすることだつて出来たかもしれない。

きつと僕みたいなぼんやりした男となんて似合わないと諦めていた、制作部のみかちゃんに、何かアクションを起こせばよかったなとも思う。食事に誘うなんて勇氣はないけれど、いつも会う喫煙室で、「お疲れさまです」「忙しいですね」「じゃあ、お先です」以外の言葉なら言えたかもしれない。

そう思い始めると、実体があつたうちは戸惑っていた一歩が、大したことないように思えた。難しいと思つてゐるのは僕自身だけで半透明の今の僕からみれば、何故こんな事態に陥つたのか、という原因を探るよりうんと簡単だ。

井戸の中から真つ暗な天井を見上げて思う。

側で焚かれた煙も、ひゅゝどろどろという効果音も、いつもなら怖いのに、全然怖くない。

そんな時、足音が聞こえた。  
できるだけ素早く姿を現す。  
これが、僕の仕事だ。

「ばあっ！」

もっと他に怖い台詞があればよかったのだろっけけれど、コピー機の紙づまりを解消することくらいしか褒められたことのない僕には、これが精一杯だった。

「きゃあああああ！」

「うわああああ!」

女の子らしい悲鳴に、僕の悲鳴が重なる。  
だって、目の前には……

「お化け!」

「あんただって、お化けじゃない! びつくりさせないでよ!」

僕は、生まれて初めてお化けに遭遇した。そして、怒られた。

ほんのり涙目の彼女は、半透明の僕とは違ってきちんと実体がある。今見えている姿が生きている時の姿なら、僕と同じ歳くらいのが清潔そうな女の人だった。髪の毛を後ろでひとつにくくって、目鼻立ちがくつきりしている。気の強うそうな瞳は揺れている。

「すみません! 僕もお化けなんですけど、初めてお化けをみてびつくりしたっていうか、なんていうか……」

大の男が悲鳴をあげるなんて、って父親が居たら怒られそうだけど、これは仕方がないと思う。清潔そうな端正な彼女の顔は、僕よりも随分下に存在している。

ばあ、と言いながら飛び出した僕の目の前に現れたのは、パンツスーツを着た女性が、小脇に首をかかえて歩いていたのだ。その瞳が左右にきよろきよろと動いていけば、驚くなという方に無理がある。首のあるべきところに、首がない。

びつくりした途端に落ちたことも、僕を心底驚かせた。



「首が、落ちたのでびっくりしました」

「……半透明のあんたに言われたくないわよ」

「……そうですよね」

それが、僕と彼女の出会いだった。

休憩時間に、実は彼女も同じ人外ハローワークだったとか、生きていた頃は僕の会社の近くに彼女の勤務先があったとか、美味しいと思ったランチのお店が同じだったとか、名前が小鳥が遊ぶと書いてタカナシと読むとゴンさんに説明したら、ステキステキと石をぐるぐる回しながら喜ばれて、たかなし様と崇められているという話をした。ゴンさんはどうも、難読な名前が好きらしい。

そんな僕と彼女が恋をして、そのお化け屋敷が縁結び屋敷なんて別名がつくのはもっともつと先の話？？。

姫と魔王と時々勇者「さらわれ常連×さらつ常連×振り回され常連」

「ねー、まだ来ないの？」

「来ないね」

「えー！ もう飽きた。帰りたい」

「まあ、そう言わずに」

「だって、御飯まずいし、ネット繋がってないし、ネイルの飾り一個取れたんだもん、テンション下がる、マジ帰りたい」

人々から怖れられ、常に周りは暗闇が纏い、負の力が渦巻く?? 設定の魔城。その城の中でコケの生えた猫足のバスタブに体を沈めながら、端正な顔の女が防水ラジオのチャンネルを合わせている。しかし、辺鄙な場所に作られた魔城は電波の通りが悪い。つい先日やっと電線が通ったばかりという田舎っぷりなので、それはご愛嬌としか言い様がなかった。

薔薇の花びらをふんだんに浮かべ、一つ飾りの取れた美しいネイルをした女は王都の生まれだ。産声を上げたその瞬間からデジタル放送だったし、インターネットは光通信が常識だ。今時力チ力チ鳴りながらインターネットをせっこら繋げるモデムなど、魔城に来るまで知らなかったものだ。過去の遺産が、魔城には最先端の技術として息づいている。

絶世の美女??という設定の姫は、雑音ばかりのラジオに腹を立てる。姫は、魔城に来るまでラジオなど聞いたことがなかった。全

てはインターネットとテレビで賄えたし、欲しい情報は検索すれば出てくるのが当たり前。そういう認識でしかない。

「まったく何やってんのよ、勇者のやつ！ さっさと迎えに来なさいよね」

ロールプレイングゲーム王国、ワンセーブ国王の一人娘。それが彼女の肩書きだ。攫うのは必ず魔王。姫を救うのは勇者。そのセオリーでここまでやってきた。

現在の姫と魔王と勇者の悲……喜劇は今年に入って百一回目。

最初はやる気のあった三人であったが、攫われ慣れた姫と、討伐され慣れた魔王と、姫に振り回され慣れた勇者のモチベーションは、随分と下がっている。三十手前の男女が送る日常としては、刺激が少な過ぎた。それが、ダレにダレきり、風呂につかりながら勇者の迎えを待つ姫、などという現状を作ったと言っても過言ではない。

「ねえ、これ壊れてるんじゃないの？ ぜんっぜん電波受信しないじゃない」

「姫が雑に扱うからじゃないかなあ……」

「はあ！？ 超繊細に扱ってるし。不良品よ、不良品！！」

シャワーカーテンの向こう側、洋式便座の蓋の上に座りながら、姫の監視を続ける魔王に向って、姫は雑音しか聞こえないラジオを大きく振りがぶって投げた。豊満な胸がふりと揺れ、バスタブから薔薇の花びらと白く濁った湯が流れる。姫持参の入浴剤だ。

「いたっ！！」

魔王の見た目は、魔物を統べる王として相応しい見た目をしている。人間よりも動物に近い見た目と、人間の三倍はあるだろう背丈はただそこに居るだけで人間を畏怖させる。ただ、人間の“慣れ”というものは恐ろしい。既に顔見知りどころか三日に一度は顔を突き合わせている姫にとって、魔王は畏怖するどころか、ペットだ。気が弱く、実は草食系。できるならば、勇者と鉢合わせせずに姫を攫ってはくれないかと考えるほど、平和主義な魔王だった。ペットが妥当な位置かもしれない。

「姫、物は投げちゃだめだよ」

「うるさいわね、じゃあ私にそんなポンコツ寄越さないで」

「姫がくれて言ったんじゃないか……」

「じゃあ私のスマホ返してよ!!」

「駄目だよ! この間まあいいかと思つて没収しなかったら、ずーっとゲームしてた挙げ句、勇者来たのに今いいところだからとか言つて、三日くらい帰らなかったじゃん!!」

「馬鹿じゃないの! ゲームじゃなくてアプリよ!!」

「なんでもいいよ!!」

角が少し泡にまみれたラジオを拾おうと、魔王が立ち上がる。ガチャリと重い音がしたのは、腰に巻かれた大剣だ。錆びないように手入れを怠っていないその剣が最後に活躍したのは、かれこれ数十年前に遡る。一度適当に振り回したら、勇者の前髪をうっかり切っ

てしまった。それからの惨事を思い出すと、魔王は今でも青い顔を  
して震えてしまう。勇者は、名の通り勇氣ある者だ。性格だけみれ  
ば、彼が魔王でも何ら不思議がないというのが世界の見解である。  
ただ、外見がべらぼうに美しい。姫と並ぶと絵になる。彼が勇者で  
あり続ける理由は、その一点のみだ。

魔王がまさにラジオを手にとった瞬間、ラジオが電波を受信し、  
世界で一番有名であり安定した電波を飛ばす放送局のアナウンサー  
の声が仄暗い魔城に響く。

「え？」

「あ、入った。そこから動いたらもう二度と電波は要らないかもし  
れないから、ラジオ動かさないでね」

「ええ！？」

先ほどまでの雑音が嘘のように、はつきりとしたアナウンサーの  
声がラジオから聞こえる。ただ、タイミングが悪かった。魔王がラ  
ジオを手にとった瞬間。つまり、でかい図体を折り曲げて中腰にな  
りながら手に取った瞬間に電波が入った。姫が言ったことを実行す  
るならば、魔王は姫の気がすむまで、地面から数センチ浮かしたラ  
ジオを動かすことはできない。ずっと中腰のまま、勇者を出迎える  
ことになる。

「文句あるの？」

「え、いや……この姿勢つらいなあって思ってた」

「普段することないんだから、ラジオくらい持ちなさいよ」

「ラジオを持つのはいいんだけど、この姿勢がー……」

「うるさい男ね、モテないわよ」

「すぐモテないって言うのやめてよ、気にしてるのに」

「じゃあそのカビくさい体どうにかしなさいよ」

「ええ、まだカビくさい？ 石けんが悪いのかなー」

そう言っただけ魔王がラジオをそつと床に置いた瞬間、ラジオは雑音に変わる。

「ちょっと！ 聞こえなくなったじゃない使えないわね！！」

「姫は人使いが荒すぎるよ」

「だって姫だもの」

そう言われては魔王は何も言えないので、またしても中腰のままラジオを数センチだけ上げる。そうすると、相変わらずかっこいいですね、というアナウンサーの声が聞こえた。どうやら誰かにインタビューをしているらしい。

『どうも』

その声に、姫も魔王も思わず我が耳を疑った。

『今回も、姫が攫われたそうですが』

『ああ、そうなの？ メール来てないから知らねえわ』

そう言い終わるが早かったか、固形石鹼が飛んでくるのが早かったか、それは誰にもわからない。小気味良い音を立てて、魔王のこめかみにヒットした。ヒットしつても体勢を崩さないよう魔王は踏ん張る。

「ちょっと魔王！ 勇者に連絡してないの！？」

「だってこの間電線通ったばかりだって言っただじゃん。業者の人が電話機の型番間違えて、魔城に合う奴を取り寄せるのに一週間かかるって言ったんだもん、まだないよ！」

「今までみたいに鳩飛ばしなさいよ」

「前飛ばした鶏が、勇者に食べられたのが最後！ 魔城にいる鳥は全部送り出したの！ 文句があるなら食べる勇者に言ってよ」

「食べられるような鳥寄越すんじゃないわよ。美味しかったわチキンステーキ」

「うわあああ、僕のアリス！」

「鳥になんて名前つけてるのよ、気持ち悪い」

アリス……と呟きながら目元をこする魔王は、ラジオの向こうにいる勇者の声に耳を澄ます。早く姫を連れ帰って欲しい。それが彼の今の切実なる願いだった。？？連れてきたのが彼だということが事実だとしても。

『今回は、どのような方法で姫を取り戻すのでしょうか？』

『あー、もう今回はめんどうなんてやめとく』

その声に魔王は身構える。こんなことを言われて黙る姫ではない。そんないじらしい姫は、この喜劇が三度目を迎える頃にいなくなつた。

「ふざけんじゃないわよ、勇者の奴！！めんどうってどういうとよ、めんどうって！」

「姫、落ち着いて」

「落ち着けるわけじゃないでしょ、馬鹿じゃないの。このコケ！！」

「え？ アリス？」

「コケくさいのコケよ！ 今この状況で、なんで私が鳥真似なんてしなきゃなんないのよ」

どうどうと中腰の魔王が姫をなぐさめている間にも、インタビュ―は続いて行く。

『面倒ですか……』

『ていうか遠いから正直ダリイ。新幹線が高速通る予定とかないんすか？』

『さあ……私どもは何とも』



『ああそう。じゃあ帰っていい？ 見たいテレビあるんで』

『姫はいいのですか？』

『ガキじゃあるまいし、勝手に帰ってきたらいんじゃない』

『この放送を姫が聞いておられたら、悲しみませんか？』

『あの女がそんなやわなわけねーじゃん。きっと風呂でも入りながらつまんねーってぼざいてやがるに決まってる』

まるでエスパーのような勇者の言葉に、姫は言葉が詰まった。勇者の想像は一ミリたりと違つてなどいない。まさしく風呂に入りながら飽きたとこぼしたところだ。

『そう……ですか、では姫に一言』

『今日の晩メシ唐揚げだから。食いたかったら帰ってこいよ』

『だそうです。以上、勇者に直撃インタビューでした』

陽気なメロディーが流れる中、魔王はそつとラジオを床に置く。雑音になったラジオの電源をそつと落とした。シャワーカーテンの向こう側では、無音が続いている。

「魔王」

「はいっ！」

「帰るわ」

「へ？」

「帰る」

「え、でも助けー……」

「帰る。あんたが鳥の話なんてするから、唐揚げ食べたくなくなったじゃない」

「じゃあ、今日唐揚げしようか？」

おそろおそろたずねると、シャワーカーテンの向こう側にいる影が、ゆらめいて止まった。豊満な胸の影がもう少しでバスタブから見える。そのギリギリのラインに思わず魔王が唾をごくりと飲み込んだ。

「……………ムネ肉、しょうが多め、にんにく控えめでよろしくね」

そう言っただけで湯に浸かり直した姫を、魔王はほっとしたような、残念なような気持ちになりながら仰せのままに、と返事をする。

「勇者が来るまで、帰らないんだから」

三日に一度の魔城訪問。

それは、勇者と姫夫妻の喧嘩の回数と仲直りの回数と比例する。

「なんで俺、夫婦喧嘩に付き合わなきゃいけないんだろっ」

許嫁から婚約者、婚約者から夫婦に肩書きが変わっても、勇者と姫は毎度喧嘩を繰り返す。今回は、姫が楽しみにとっていたチキンステーキ最後の一切れを勇者が食べた。それが発端だった。

「何か言った？」

「いいえ、何も」

「あ、そうそう。明後日合コンあるらしいんだけど、来る？」

「いきます！　いかせて頂きます！」

三日に一度の姫さらい。

それは、魔王の合コン回数と比例する。

「あ、鳥ないんだった」

合コンに浮かれた魔王がそれに気付くのは、随分と後のことだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9783y/>

---

短

2011年12月5日23時45分発行